
深層心理レメゲドン

オンドハツギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深層心理レメゲドン

【Zコード】

Z5024F

【作者名】

オンドハツギ

【あらすじ】

僕の非日常は終わったはずだった。村上水色と駆け抜けたあの夏休みと一緒に。だけど、僕の非日常はまだ続いている。スクールカウンセラー夢野かのんとの出会い。富部現実との邂逅。メリケンサックの通り魔。悪魔憑きはもうこりごりなのに まつたく、やつてられないね。そつは思わないかい ねえ莉鈴さん？

プロローグでさらないメランコリー 1

江戸川・フルールフル・莉鈴。りりん。

この名前を、僕は決して忘れはしない。

高校生活最初の夏休み。

村上水色と駆け抜けた、あの悠久とも刹那ともいえるモラトリアム。

その虚う時計仕掛けの中で、僕は色々な人間と出会い成長した。

僕の恋人だつた村上水色みずいろ、然り。

僕のドッペルゲンガーだつた東野露樹ひのゆき、然り。

僕の幼なじみである夢枕ありす、然り。

ヴァンパイアを自称する、太宰ルカ。

その従者の芥川ベリ子。

名探偵、京極京子。

天災、いや、天才科学者、森玉藻たまも。

そして、僕の抑圧された精神を具現した魔術師、恩田黒瓜くろう……然

り。

そんな数ある出会いの中でも、彼女だけは、江戸川・フルールフル・莉鈴だけは、一際異彩を放つていた人間だつたと、思う。

椿鬼姫。

宇宙規格。

オールインワン。

人類のハイエンドモデル。

四凶。

四騎士。

外典。

ナンバー13。

レッドコメット。

ナイトメア。

エトセトラ、エトセトラ……。

彼女の個性を現す通り名は引く手あまだけれど（露樹いわく、千の通り名を持つてゐるらしい。、まったくラヴクラフトが妄想した神性でもあるまいし。信じがたい眉唾話ではあるけれど、まあ、莉鈴がトリックスターであるというスタンスはあながち的外れではないと思つ）そんな作られた人格だけが彼女の全てを表現するものじゃないつてことは僕にはわかっている。もちろん、江戸川・フルフール・莉鈴の本質が、そんな下らない文字列だけでは定義できないつてことも……。

「ねえ、すけあくろー。村上水色が、本当に君のことを好きだと思う？」

「ねえ、すけあくろー。村上水色は、本当は君に逃げて欲しいとは思つていらないんだよ？」

「ねえ、すけあくろー。すけあくろーが、このまま変わらないとしたら、村上水色は本当に君のことを殺そうとするよ？」

そう、異彩を放つっていたのは、彼女のその姿形よりも、彼女が放つその声その台詞。

真つ直ぐで実直で、

真つ直ぐすぎる故に実直すぎる故に、

彼女のあの声は、

莉鈴の紡いだあの台詞は、

僕の心を深く抉つてしまつた。

だけど、僕はその頃まだ子供のままで、外敵である莉鈴を認めたくなくて、恋人である村上水色を信じていてたくて、大人になりたくない僕は、ずっと子供のままでいたかった僕は、心の抉れてしまつたその部位に深く深く抉れてしまつたその部分に、彼女の言葉を仕舞うことしかできなかつた。

それは、まるで蜂蜜みたいなのだ、甘さ。

それは、まるで蜂蜜みたいな蕩ける粘性。

でも、僕は江戸川・フルフール・莉鈴のそんな言葉に溺れたく

はなかつた。

でも、僕は村上水色の心地よさに漂いたかつた。
現実に浮かぶよりも、理想に沈んでいたかつたんだ。

だから、僕は彼女を傷つけてしまつた。

ジーンズのポケットに隠した熱帯魚で、
如才なくフィジカルに彼女を切り刻み、
如才なくメンタルに彼女を切り刻んだ。

それでも彼女は、

それでも江戸川・フルフル・莉鈴は、
血に濡れた白い顔をほころばせて、
だけど少しだけ憤慨を伴つた笑顔を僕に見せて、
彼女はこう言つたのだ。

「いい加減、目を覚ましなよ」

そして、彼女も僕を傷つけた。

彼女が持つてゐる毒々しい深海魚に甘い言葉を乗せて。
その時は生き残ることに無我夢中で、彼女の言動はわけがわから
なかつたけれど、今なら、夏休みを終えた今なら、村上水色との逃
避行を終了した今なら痛いほどわかる。

いや、本当はわかつていたんだ。

だからこそ僕はこうしてこの場所にいるから。

君のおかげで僕はこうしてこの場所にいられるから。

「はつはつー。だったらあたしをリストクトしな！ 蛤蠣みたいに
地べたに這いつくばつて神様みたいに感謝しろよな」

ああ、本当に感謝しているよ。

いや、でも、その言い草はあまりにも酷くね？

「酷くなんていねー！ それを言つなら、可憐な乙女を血まみれ
にした拳句、路上に放置プレイするすけあくろーの方が酷いと思う
なー。口リ大国日本では考えられない所業ぜよ」

いや、口リ大国つてお前。

いやいや、それよりもどうして僕のモノローグにお前はツツコミ

を入れて いるの？

いやいやいや、それ以前に路上なんかに放置してないから。
いやいやいやいや、そんなことよつもビビってお前は！」こういふの？ これは夢なの？

「あー色々と煩い！ すけあくろー、いい加減田を覚ましなよ」
ああ、久しぶりに聞いたなその台詞。

だったら、いい加減田を覚ますよ。

お前の言うことだつたらなんだつて聞いてやるわ……。

そして、僕はおもむろに田蓋を開く。

どうやら僕は眠つていたらしく。

夏休みが空けて七田田。

モラトリアムを引かずるにせつてつけの期間。
皮膚の上にひりつくのは夏の日のプロミネンス。
田蓋の裏にひりつくのは夏の日のセンチメンタル。

「うわ！ センチメンタルだつて、だつた！ センセー！ あの席の男子が痛くて仕方ありません」

「痛い言つなよ」

そして僕は彼女と再会する。

今度は外敵ではなく、

今度は非日常でなく、

今度は普通の女の子として、

今度は平凡な日常として、

恩田崇は江戸川・フルフル・莉鈴と再会した。

プロローグでありますメモノコリー 2

これがもし小説だったならば、転校生（あえて美少女とは定義しない）の座る席は偶然にも空席で、尚且つその席が主人公と絡みやすい位置にあるものだ。例えば、僕の隣りの席だったり、前方あるいは後方の席だったり。ようするに、ゼロ距離とは言わないまでも、お互いの声や手が容易に届く距離が望ましいし、都合が良い。だけど、僕がいるのは現実であり、ましてや僕は物語りの主人公でもない。よって、江戸川・フルール・莉鈴は、最初は僕と絡みさえすれど、そこから物語りは加速度的に進行することはなく、淡々と自己紹介をこなし、お互いに声も手も届きそうにない廊下側の空席（もちろん、偶然空いていたわけではない、転校生のために予め用意されたものだ）に彼女は落ち着いたのだった。

「じゃあ、皆仲良くしていくことで、ホームルームを始めますよ」

担任の声で、ざわついていた教室が静かになる。江戸川・フルール・莉鈴に集束していくクラスメイトの視線がおもむろに教壇の三島桜子に向けられていく。僕も彼女から視線を外して、教壇の方角へ首を向けようとした。と、そのとき、隣りの席に座っている女の子と視線が重なる。黒色のセルフレームに収まつた大きな瞳が、僕を真っ直ぐに捉えていた。

「知り合いで？」瞬きもせずに、彼女は訊いた。

「ん、まあ、ちょっと」

「ちょっと？　ふーん」片目を細めて、彼女は不適に笑う。「お前の言つことだつたらなんだつて聞いてやるさ……」

「え？　何それ？」

「寝言」

「誰の？」

「もちろん、恩田くんの

「僕？」

「そう、君」人差し指を突き出して、彼女は首肯した。「お前の言うことだったらなんだって聞いてやるさ……、そしてはこかむ彼女の顔。それが、ちょっとした知り合い？」

「いや……」僕は口ごもる。「いや、本当に夏休みに一度会つだけなんだ」

「あ、そう。まあ、それは良いけど」

「いや……、って、良いのかよ！？」だつたら訊くなよほつといてくれよ、とまでは口にせず。僕は彼女の言葉を待つた。

「良いよ、私はね」ふふん、とせせら笑つて彼女は言つた。「私は良いけれど、ありすがね。彼女がどう思うか。問題はそれにつきると思う」

「眼鏡も黒いが、腹も黒いな。脅迫か？」

「そう思つてもらつても良い。でも、私がするのは脅迫ではなく、提案」

「で、その提案つていうのは？」

「まずは、受けけるか受けないかの返答が重要」

「わかった」僕は首を竦める。「それで、提案つていうのは？」

「放課後、実習棟へ来なさい。もちろん、あの子も一緒にね」彼女はおもむろに後方へと首を向ける。「江戸川・フルフル・莉鈴と一緒に実習棟へ来なさい。ちょっとした知り合いなんでしょう？」

「わかったよ」

「良い判断。恩田くんの恥ずかしいポエムは、私の中で封印していくあげる」彼女は僕に微笑んでから、姿勢を正した。「じゃあ、大人しく点呼を待つ」

「あ、はい」僕も彼女に倣う。が、途中でそれを放棄。首を彼女に向かたまま、僕は訊いた。「いや、ちょっと待つて、僕の恥ずかしいポエムつて……」

「色々と聞かせてもらつたわ」彼女は僕を一瞥して、鼻息を漏らす。

「譲んじて欲しいの？ 多分、悶絶死は必須だと思う

「いや、遠慮しておきます。桜庭の中に永遠に封印してやつて下さい」

「良い判断」慄懾そうに彼女は頷く。つて……、どんだけ恥ずかしかったんだよ、僕の寝言は……。

担任に名前を呼ばれて、それに応える。

それから、隣りの席に座つていてる彼女の横顔を僕は眺めた。
桜庭灰霧。かいむ

クラスメイト。

夢枕ありすとは中学校以来の友達で、僕とは高校生になつてからの知人。だけど、もちろん桜庭がありすの親友だったことは寡聞にして知るべくこともなく、ただただ席が隣り合つていたというだけで気づいたら良く話すようになつていて、という間柄だ。でも、桜庭は当然僕のことをありすから聞いていて、そのことを僕が知ったのは彼女と話し始めてから随分あと、僕が村上水色との逃避行を開始する前日、つまり一学期の終業式、夏休みの一日前である。ちなみに、桜庭、そのときにですら彼女からは何も言つていない。

以下、回想。

ひやつほーい、明日から夏休みぞよ。崇一、そういうことでばつちり遊び倒そうぜ？もちろん、灰霧も一緒にね。本ばかり読んでもつまらんでしょ？ああ、でもでも三日に一度くらいは崇だけと過ごしたいなー。ねえねえ、灰霧、許してくれる許してくれる？許してあげる。

だつはー！ やつたぜ崇！ 私たちは灰霧の公認会計士だよ。

意味わかんねーよ。つーか、お前ら知り合いだつたの？

友達だよん。灰霧から聞いていないの？

いや、聞いていないけれど……。桜庭、そうなのか？

そう。私とありすは中学校からの友達。

聞いてねー。

色々と観察させてもらつたわ、飾らない恩田くんをね……。

回想終了。

そういうことで、なかなか手の内を見せてくれない、ワイルドカードはぎりぎりまで取つておく、そういう腹にいち物を持つ女の子である。油断できない、いや、油断することすら叶わない、何気にも危険な隣人。それが桜庭灰霧。でもまあ、僕はすっかり油断しきつて、こうして新たに外交カードを彼女に提供してしまったわけだけれど。

それにしたつて桜庭、それ行使するにはいささか性急すぎやしないか？

まったく、彼女らしくもない。

江戸川・フルフル・莉鈴を同伴させるのも理解できない。

わからないことだらけだ。

「理解できない。そういう顔をしている」ふと、そんな声が漏れるのを認識する。「それはまあ当然。でも、放課後になれば万事解決。実習棟へ来れば全てが十全になる」

見てみると、桜庭は人差し指で眼鏡を直しながら僕を見据えていた。「それまで我慢、偲ぶ心で」

格好ついているところ悪いんですけど、

桜庭さん、その漢字間違っていますよ。

桜庭の揚げ足を取るつもりはないけれど、少しだけ懐かしんでみようと思う。懐かしむというからには、僕にとつてその対象は過去であり、故郷やまして故人でもない。この街を故郷と呼ぶには僕はまだ若すぎたし、故人を思うほど僕はまだそれほど生きていはない。でも過去として懐かしむにはそれは色褪せているわけでもなく、あって言うならば、その過去はインスタントラーメンみたいなもので、お湯を注いでしばらく待つていれば美味しいだけてしまつようなお手軽なものだ。

教室での江戸川・フルフル・莉鈴との再会は、僕にちょっとしたサプライズを与えたものの、それはもちろん許容範囲内にある事象である。だから、こうして僕は平静を保つていられるわけなのだけれど、もし仮にその情報を事前に取得していなければ、僕はきっと江戸川・フルフル・莉鈴にたいしてとても冷静ではないれなかつただろう。

まかりなりにも、殺し合つた仲である。

引き分けならぬ痛み分け。

常勝の鬼椿。

ガシャドクロの椿鬼姫。

江戸川・フルフル・莉鈴。

その彼女に、僕は勝利すらできなかつたけれど、また敗北することもなかつた。

殺し合つた故に僕たちはわかりあい和解したのだが、殺し合い和解したところで、ゆずれないものまで氷解することは難しいと思う。何せ僕が現れるまで彼女はこの街に君臨していたのだ。もちろん最強として。

最強。彼女が常勝していたが故に、手に入れることのできた最高の称号。それを僕は、まるで素人同然、素人と同義のこの恩田崇が、

彼女を、江戸川・フルフル・莉鈴を最強の座から引むすり降ろしてしまったのだ。

彼女は勝利はしていないが、また敗北もしていない。

痛み分けならぬ引き分け。

それはもう常勝すらでないし、最強なんておこがましい。

でも、彼女が再戦を望めば、全てがリセットされ十全になる。それを僕は心のどこかで恐れていた。と同時に彼女との再会を漠然とだけれど、僕は予感していた。いつかまた会う日があるんじゃないかつて……。僕が奪った彼女のプライドを、いつか返してもらいたいに来るんじゃないかつて……。

時計仕掛けを三回半ほど逆に回す。

三日前。

恩田家。

午前六時。

「おっはいよー」

携帯から漏れ出でてくる声に、僕は嘆息する。「何なんです？」

「おっはいよーから

「おっはいよー」

「……」

「おっはいよー」

「いや、だから……」

「おっはいよー？」

「お、おっはいよー」

「何だ恩田くん、君はちやんと挨拶できる子じゃないか。それならそつとそつとお返事してくれたまえよ。私はとても忙しい身なんだ、元気な子たちがやんちゃしてくれるとおかげでね。正直、君と私とを繋いでくれていいこの携帯電話を今すぐにでも放り投げてメスを持ち直したい気持ちだよ。まあ、そつはいかないから今こうして君とお話ししているわけだけれど。あ、恩田くん、だつたら左手があるじやないかという野暮なツツ」「ミはしないでくれたまえよ。携

いや、僕はあなたのことをまったく理解できていません。

「そつだそつだ。私は君に用件があつたんだ。だから、私は君とこ

うしてお話しをしているわけだな。なかなか鋭い洞察力ではないか
恩田くん。あの名探偵京極京子と肩を並べても遜色しない名推理ぶりだね。正直、私は君に感服している次第だよ。ああ、まったく、君の爪の垢でも煎じた青汁を露樹に飲ませたい気持ちになるなあ。いやはや、姿形は似ていても恩田くんと露樹とは対極の位置にあるね。ようするに、陰と陽だ。ん、そうするとこの場合、君が陰で露樹が陽ということになるな。うん、これは恩田くん大好きっ子のこの私には得心できかねるスタンスになるね。言いかえよう。君が陽で露樹が陰だ。陽と陰。陽と陰、陽と陰……、ああ！ 恩田くん突然で悪いんだけど、陽と陰つてよーいどん！ とは似ていなかな？」

「あ？ ああ、似ているなあ！」 そう快活を取り繕つて返事をする僕。だけど、ケータイを握つている手は夢野さんをその中に閉じ込めようとうとうに蠢いていた。「じゃあ、夢野さん。僕はこれで！」「うん、そうだね。私も忙しいし、また掛けることにするよ」 そこで夢野さんは軽く舌打ちをする。

「あ、ごめんなさい。別に切ろうとしたわけでは……」

「何を謝つているのかな？私は、自分のおつちょこちょいさに軽く苛立ちを覚えたなんだけれど……」

「あ、そうですか」

「それよりもね恩田くん。私は君に大事なお話しがあるのだよ。それを見失っていた」

僕は黙っていた。うつかり合の手を入れたら、またぞろ延々と喋り続けるかもしれないと思つたからだ。

「江戸川・フルフル・莉鈴が君に会いにくるやつだよ」

だから……、

だからこそ、僕の作り出したその沈黙が、夢野さんの発するセンテンスを吸収させるには充分すぎた。

充分すぎるが故に、そして沈黙で綺麗にパックされてしまったが故に、彼女が届けたそれを受け取るのに、僕は思わず躊躇してしまう。

だけど、そんな僕の間隙を夢野さんが見逃すわけでもなく、

「江戸川・フルフル・莉鈴が、恩田崇に会いにくるそうだ」

そのパックされたセンテンスに、さらに言葉を押し込めてぎゅうぎゅうにして、僕の鼓膜に捻じ込んでくる。

もちろん、思考は飽和状態。

「江戸川・フルフル・莉鈴が、僕に？」脳に充填した酸素を逃がすように、僕は思わず言葉を口にする。

「そうだ。君が血まみれになつて運んできた、君が血まみれにして運んできた、あの江戸川・フルフル・莉鈴だよ」

「どうして？」

「愚問だね、恩田くん。そりやあ決まつているや……、彼女が君に会いたいからに決まつている」

「会いたい？　この僕に？」

「そう君に、だよ。恩田崇くん」くすりと、夢野さんは笑い声を漏らす。「だけどね、恩田くん。恩田崇くん。君が考へてるほど、君が声を震わせるほど、事態は深刻でもないし事実は衝撃的でもない」「いや、だつて僕は彼女を傷つけてしまったわけだし」

「しかし、彼女もまた君を傷つけてしまったのだろう？」夢野さんはやんわりと、それでも反論を許さないくらいに微妙な圧力を持つ

て僕を制する。

それでも、僕は彼女の名前を口にせざるを得なかつた。

それは反論ではなく、確固たる事実。

「だつて、江戸川・フルフル・莉鈴なんですよ？」

その事実に夢野さんは嘆息して、

「そして、何よりも彼女は女子なのだよ」

嘆息しながらそう応える。

「恩田くん。君はいわさか彼女のことを誤解している節があるね」

「誤解、ですか？」

「そうや。恩田崇は江戸川・フルフル・莉鈴を誤解している」
誤解しまくつているのさ、君はね。そう言葉を繰り返して、夢野さんは続ける。「私もこうこう身分なんでね、彼女の名声は寡聞にして知るところや、もちろん彼女のその武勇もね。まったく、露樹が言うところの千の通り名を持つ少女とやらには失笑を禁じえなけれども、いや、しかし彼女の個性を表すにはそれもまた得心できる。それくらい彼女は、江戸川・フルフル・莉鈴といつねば、この街に恐怖を与えるには充分すぎる個性なんだ」

「だつたら……」

わかつてゐるでしょ？

もちろん、そんな言葉を僕はひりだすわけでもなく、口腔に溜まつた唾液の中にそれを沈める。でも、夢野さんはそんなことはお構いなしに、まるで僕のことなんか知つたこつちやないといつぶつこまるで僕のことを知つたふつこつぶつと、

「わかつていいね」

そんなことを言つ。

「わかつていいない。君は全然わかつていいないよ、恩田くん、恩田崇くん。君はまるつきりこれっぽちもわかつちゃいないわ」

僕は黙つていた。

黙る以外、どうしろと？

夢野かのかは、一体僕にどうじるといつんだ？

「簡単なことだよ、恩田くん。君はありのままの姿で、ありのままの彼女に接すれば良い」

「どういう意味ですか？」

「やれやれ、困ったちやんだね君は。じゃあ逆に訊くけれど、君は一体、江戸川・フルフル・莉鈴となにをやつていたのかね？」

「殺し合い」

「そうだ殺し合いだ。お互いの中身を全部恥ずかしげもなく曝して晒してぶちまけて吐き出して、それをありつたけの全力で、全身全霊を持って、持てるだけの力を、持て余した感情を、惜しげもなく勿体ぶるでもなく、ぶつけ合つた一人。それが恩田崇と江戸川・フルフル・莉鈴ではないのかな？ それでも尚、そんな勝負をしても尚、そんな殺し合いをしてでも尚、君は恩田くん恩田崇くん、君は江戸川・フルフル・莉鈴のことを、わからない、と言つのかな？」

「そんなこと！？」

「誰も言つていない。

彼女のことを、わからない、だなんて僕は言つていない。
彼女のことを、わからない、だなんて僕が言わせない。
僕が知つてている彼女は、

僕が知つてしまつた江戸川・フルフル・莉鈴は、

……、そんなものじゃない。

「何だわかっているじゃないか」携帯の向こう側で、ぱちぱちと空気が爆ぜる乾いた音。「そういうことだよ、恩田くん。君が彼女に見せた個性が偽りだつたように、彼女もまた君に見せたその個性も作られたものなんだよ。だからこそ、君は、江戸川・フルフル・莉鈴と殺し合いわかりあつた、君ならば。彼女を、わかつていて、君だからこそ、ありのままの彼女を受け入れができるんじやないかな？ そして彼女も然りだ。ありのままの君と再会することを、江戸川・フルフル・莉鈴は望んでいるんだよ」

それは非日常ではなく、極々平凡な日常だ。

夢野さんはくすりと笑つて、そう締める。

「随分と彼女の肩を持つんですね」

「そりやそりや。私は恩田くんと同じくらい江戸川・フルフル・莉鈴のことが大好きだからね。いや、大好きになつたと言つべきか……。くふふ、恩田くんの生徒手帳を眺める彼女の表情、君に一度見せたかつたな」

は？ 生徒手帳？

そんな僕の疑問に彼女は入り込む余地は欠片もなく、そんな彼女の台詞に僕が入り込む余地は微塵もなく、まるで友達にでも秘密を打ち明けるような親密な、

夢野かのかは、

こう繰り返すのだった。

「君の生徒手帳を眺めるあの表情……、あれは乙女の顔だったぜ？」

「乙女ですか……」

「そうこうことか」うんうんと、声を出して彼女は言ひ。「あとは言わざもがな、言わざが華だよね。まあ、そうこうことによろしくやってくれたまえよ」

「いや、よろしくつて……」

「おつと、これ以上何も言わないでおくれよ。そうじゃないと、君の唇に遅からず針と糸が通ることになるぜ？」

「そいつは御免ですね。まったく、『冗談じやない』僕は夢野さんに笑い返す。「用件とやらはこれで終わりですか？ だったら、僕は携帯を閉じますけど？」

「それは君の思うがままに。まあ、少しばかり寂しい心持ちではあるけれどね。しかし寂しくはあるが、同時に頬もしくもあるな。くふふ、恩田くん、やはり君の成長振りには目に見張るものがあるね。正直たまらないよ。今夜にでも君をおかずにしてもいいかね？」

「冗談じやねーよ」

「どうくさに紛れて何を言つてるんだ、この人は。

さすがは、恩田君大好きっ子を自負する夢野かのか。

その探究心（性欲）はあなどりがたし……。
携帯を閉じた手がいまだに震えてたまらねーぜ。

プロローグでりないメソン「リー 4

「もう少しの辛抱……」

ふと、そんな声が耳元をくすぐつた。
と同時に右手にひんやりとした感触。
どうやら僕は眠つていたらしい。

巻き戻した時計仕掛けは気がつくと元に戻つていて、気がついた
僕はぼんやりと彼女の手を眺めていた。

「わかつてゐるわ」

隣人の眼鏡っ子は優しく微笑む。それから軽く当ててている僕の手
に少しだけ圧力を加える。もう片方の手は口元に停滞したまま、白
い人差し指を唇に当てて、何も喋るなのジェスチャー。「私は、わ
かつてゐるから。だからもう震えないで」

彼女の真摯な瞳に、なんだか僕は笑えてきた。
どうやら彼女は僕のことを心配していただけ。
でも、それはとんだ勘違いだ。

「いや、違うんだ。これは……」

「この人差し指が、親指姫に見えて?」鋭い視線と声調で、彼女は
弁解しようとする僕を制する。いや、親指姫って意味がわからない
んですけど。「だから、恩田くんは黙つて待つ。それで全てが十全
になる」

「そうですか」

そんな僕の相槌すらも彼女は無視して、僕の手にその柔らかい手
を当てたまま大人しくしていた。それからおもむろに数字を詠んじ
始める。視線は僕に向かられていない。壁に掛けられている時計仕
掛けを見つめたまま、

「ごー、よーん、さーん」

何故かカウントダウンをしていた。

「にい……」唇を結び、彼女はにやりと不適な笑みを見せる。

そしてそれは訪れた。

だけど、それは彼女の掛ける魔法の合図ではもちろんなく、ましてや終末を予感させる不吉なラッパの音色でもなく、四限田の終了を知らせる極々平凡で単調なチャイムの音だった。

「ほらね」彼女は手を離して、にっこりと微笑む。「恩田くんが待ちに待ったお昼の時間よ。震えるほど待ち焦がれていたなんて、とんだ腹ペコキヤラさんね」

「桜庭はとんでも勘違いキヤラだけどな」

「酷い言い草。あーあ、心配して損しちゃった。ねえ、恩田くん。わざと君にあげた私の優しい気持ち返してくれる？ その鞄の隣りに引っ掛けている美味しそうなお弁当と一緒に

「腹ペコなのは桜庭じやないか」

「そう私は腹ペコ。そして今はお昼休み。腹ペコな私はありますと一緒にお弁当を突っつくことにするわ。だって今はお昼やすみだもの」そう言つて桜庭はおもむろに立ち上がる。それから僕を一警して制服のポケットから手帳を取り出した。「そして私はありますのメッセンジャー。楽しい楽しいお昼休みは、楽しい楽しい定時報告の時間、メモメモっと。じゃあね恩田くん、良いシエスタを」

「いや待て！ 何だその定時報告つてのは！？ それに何だその手帳は！ メモメモって、一体それに何を書いていたんだ！？」

「ありますに君の動向を報告するためだよ。そしてこれは、君の動向を書き綴つた真実のメモリー」

あの幼なじみ、最近めっぽう毎に姿を現さないと思つていたら影に隠れてこんなことを……。

いや、それよりも、そんなことよりも。

僕が今、気に病んでるのは、僕が今、気に病むべきものは……。

「お前が真実と言つて憚らない、その怪しげな手帳だーーー！」

そう僕が叫ぶや否や、桜庭は身を翻し僕の追撃から逃れようとする。が、しかしそこは桜庭、持ち前の読書家スキルを發揮してその運動神経のなさを露呈、あっさりと僕に捕まる。

「にゃん」桜庭は借りてきた猫よろしく、大人しくなり僕を見上げる。「許して欲しいにゃん」

「キャラ変わりすぎだつてーの、可憐く懇願しても僕は騙されません」嘆息したあと、僕は桜庭から手帳を取り上げた。「まったく油断も隙もあつたもんじゃねー。悪いけど桜庭、中身は見せてもらつぞ」

きょうおんだくんがいやらしげなつつきでわたしのてをまさぐりました。

わたしがないてやめるようこつても、おんだくんは、しんぱいいらないよ、といみがわからないうことをこつてわたしのてをまさぐりつづけています。それはおひるやすみまでえんえんとつづきそうです。わたしはもうどうしていいかわからなくて、ずっとなきつづけるばかりです。わたしがなきつづいているいまでも、おんだくんはひつように戓しのてをまさぐりつづけています。めつきなんかもつすいです。とてもじやないけれどせいしにたえられるものではありません。はないきなんでもうけものそのもので、おもわずみみをふさぎたくなります。ああ、ありますわん。ありますわん。わたしはずつとこのままおんだくんのなべたみものになるのでしょうか？

「……」

「……」

「……」

「……」

「にゃうん？」

「これのどこが真実！？」

そして、何故全てが平仮名！？

「僕は今日ほど桜庭の存在を恐ろしく思つたことはないぜ」

「誓めてるのに、握られている手に力が込められてるのほこれ如何に？」

「いやいや誓めてなんかいないから」やれやれと、僕は桜庭をいなして握つてはいる彼女の襟首から手を離した。「まあ、最もこんな荒唐無稽なこと信じる奴はないけれどさ……」

「ふつ……、わかっていない」そんな僕を桜庭は嘲るよつとせせら笑いながら言葉を続ける。「恩田君は何もわかっていない。世界は女子にとてもとても優しくできていってよ?」

「どういう意味だ?」「

「決まっている」唇を持ち上げたまま、桜庭は僕が持つていてる手帳を一瞥する。「恩田くんがそれを白だ白だと否定しきうが、私がそれを黒と肯定してしまえば、それで全てが十全になる。何故なら私は女子だから。ねえ、恩田くん。君になら、私が言つている意味がわかるはず」

「黒い……、どうしようもなく黒いぜ桜庭っ! 桜庭を通して世間の抱えるジョンダーの憂いがまたひとつ露見してしまつた……」

「そう。男女平等だなんてただの飾りですよ」

くう、確かにそうだが。

確かにそれっぽいふうだと僕も思つただが。

例えそうとしても。

例えそれっぽいふうだとしても。

まだ主導権は僕の手に握られていて。

「しかし、その真実とやらも、僕の手に握られていてほびつする」ともできまい?「

僕は二ヒルに笑つて、桜庭から取り上げたその手帳を頭上に掲げる。

だけど、桜庭はそんな僕の行動にさして興味を示したわけではなく、軽く手帳を一瞥してから僕を見据える。

その瞳は、諦観ならぬ明らかに達観。

その唇は、侮蔑ならぬ明らかに愉悦。

彼女はそんな表情を、主導権を握つて尚も僕を不安にさせるそんな表情を、まるでトーストに載せられているバターみたいに、その顔にしつとりと塗りたくつっていたのだった。まるでそうするのが当たり前のようだ。

そして……、

そして彼女はいつ頃くのだと、

「ニーソ」

と、ただ一言。

「……」

「は？」当然、僕は眉を顰める。そして必然的に口から漏れ出でぐるのは、疑問符でアレンジされたこんな反芻。「ニーソ？」

「いや、ごめん間違えた。訂正、訂正」どうやら桜庭さんはそういうことらしい。珍しく彼女は頬を赤らめてから、ニヤソ、ニヤソ、ニヤソだった、と訂正した。

「ああ、含蓄のあることを表現したかったわけか」僕は短く鼻息を漏らす。「しかし、桜庭。お前って肝心なところでしまらない奴だよな」

「ほつ」といて、唇を尖らせて桜庭は僕を睨む。「いやあ、僕はてっきり桜庭がニーソフェチで、好きで好きでたまらなくて思わず口にした言葉だと思ったよ」

「そういう恩田くんはどう？」反論するかと思こきや、桜庭は僕の思いつきの台詞に乗つてきた。

「まあ、眺めるくらいなら」

「つて……、何で僕も彼女に乗つているんだ。

「なるほど。恩田くんはフェチを自負するくらいのニーソ好き。毎日ハアハア悶えながらニーソっ子をねめつけてくる、メモメモ」「いやいやいや、だからそうしてありもしない」とを書くなつて……

「……」

今、僕は何て言った？

桜庭のツールは僕が封じてはいるのに、ビリしてそんなことを言ったんだ？

「浅はか」僕のそんな動搖を、桜庭はシニカルに一蹴する。「眞実は一つとは限らない」

思わず僕は桜庭から視線を外して、手にしている手帳を確認する。でも、やはりそれはそこに確かにあって、気づかない内に彼女の手に渡ったというわけではなかつた。が、しかし彼女の言った通り眞実は僕が手にしているのが唯一ではなく、また彼女が手にしているそれも僕が手にしているそれと同義、いや、それ以上の脅威を持つ危なつかしいツールには違ひない。

僕は恐る恐る、桜庭がちらりと見せたそれを、彼女が持つていてそれを確認する。

ちくしょつ……。僕はまんまと彼女に踊らされていたというわけだ。

「提案があります」僕の視線を田で追つたあと、彼女は満足げに言った。

「で、その提案とは？」

「それよりもまず、受けるか受けないかの返答が重要」

「はいはい、わかりましたよ。最も僕にそんな決定権はないと思つけれど……」

「わかれば良し」僕の返答を聞いた桜庭はことやら満足げに頷き、それから手にしている携帯を厳かに閉じた。「恩田くんに、良いシエスタを……」

つーか、桜庭さん。

ついさつき、僕は起きたばかりなんですけれど……。

プロローグで登場しないメイクン「リー」5

鬢削。
びんせき。

平安後期から室町中期に亘って呼ばれていた髪型の一つ。それは貴族の富と美貌の象徴であり、また庶民の羨望の対象でもある。

今となつてはその意味ももはや形骸化し文字通り形だけになつてしまつたけれど、しかしそれは逆説的に言えば形だけとなりその意味が形骸化したからこそ、千数百年の時をえて尚も存在しえたのではないか。その意味を失つたが故に庶民に波及し、その意味を失つたが故にそれは世間に流行したのだ。伝統という歴史的存在感として。

今、僕はその歴史的存在感をぼんやりと遠巻きに眺めている。

これほどあの髪型の似合う少女を、寡聞にして僕は知らない。

もちろん、その少女の名は、江戸川・フルフル・莉鈴。

頸の辺りまで流れる漆黒の髪、その狂おしいまでの悪魔的な美しさに包まれた均整の取れた小さな白い顔。かんなはせそして、その均整の取れた顔にさらなる存在感を与える厚く切り揃えられた前髪。

「あれは良いものだわ」うつとりとした声で隣人の眼鏡っ子は言う。「良いものは決して無くなりはしない。幾千幾百の時を流れて、その名が変わることはあるても、その本質かたちは決して無くなりはしない」そして、薄く瞼を閉じた彼女はこう続けるのだった。

ビバ伝統、
ビバ姫カット、
ビバ

と。

「いや、桜庭さん。見とれているところ悪いんすけれど、早くその提案とやらを仰つていただけないでしようか?」

「興醒め」嘆息したあと、桜庭は僕に方へ振り返る。「モノローグでノリノリだつた君は一体どこへ行つてしまつたの?」

まつたく、僕のモノローグにまで介入するなよ。

まあ、ノリノリのだつたは僕も認めるところだけど。

「いや、そんなことよりもだ」僕は咳払いをして、壁に掛けあると時計仕掛けを見る。「桜庭とのやりとりで、昼休みが結構削られたみたいだけれど」

「恩田くんがエロリストだからよ。責任取りなさい」

「誰がエロリストだ！」

「じゃあ、エロエロリスト」

「……」

「じゃあ、エロエロエロリスト」

「悪魔が呼べそうだな」

「私は黒い奴よりも、白い奴と呼ばれる悪魔が好き」

「いや、桜庭さん。量産型には量産型の良さがあつてですね……、いや、つーか、もうこれくらいで勘弁してください」

「そうね。エロリストの恩田くんと無為に時間を過ごすよりは、ありすと有意義に過ごしたほうがいいものね」

「酷い言われようだ……」

しかし、ここは忍ぶ心でべつと堪えて、僕は提案を示すよう桜庭を促した。

「彼女とお昼を過ごしなさいな」桜庭は言った。

彼女？

僕は首を傾げる。

僕と桜庭以外のクラスメイトは、皆思い思いにグループを作り弁当を広げていた。その場に立っているのは僕たち二人だけ。もちろん、僕にはもう彼女と呼べる特別な存在は既になく、桜庭が言う彼女が単なる三人称代名詞だと凡そ検討はつくけれども、しかしそれにしたて桜庭……。

「一体、僕は誰に声を掛ければ良いんだ？」

まさかオカルト好きが高じて、とうとう守護天使でも見えるようになつたか？

彼方を見つめるような胡乱な眼差しを見ながら、僕はそんなことを見ねる。

「そりだつたら素敵ね」桜庭はくすりと笑う。「でも残念そりじやない。私がしているのは素敵、そして捉えた姫カツト「いや、相変わらず意味わからんねーよ」つて……まさか。

「そり。恩田くんは、江戸川・フルフル・莉鈴とお皿を迺」すの」

「えつ？ それだけ？」

「そう、それだけ」桜庭は首肯する。「そして幸いにも彼女はまだ一人

「うつ、何だその含蓄が見え隠れする言い回しは？」

「彼女、ズーとお皿まで女の子に囲まれていたよね？」いつ恩田くんがその中に入つて、朝に私がした提案をこなしてくれるかズーと観察していくんだけれど……、まったく、とんだチキン野郎だわ」「悪かったな……、チキン野郎で。でも桜庭、別に今じやなくとも放課後に誘えれば良いんじやないか？」

「そうね。でも今じやなれば、一番目にした私の提案は恩田くんには不可能と思つけれど？」

確かに。

「それに」と、桜庭は僕を一瞥して、それからおもむろに頷いた。「朝のやりとりだけじゃ色々と物足りないでしうね、お互に」「何だよわかつたふうに……」

「わからいでか」そう言つて何故か桜庭は制服のポケットから携帯を取り出す。「ちなみにこれ、ボイスレコーダーという素敵機能がオプション装備されています」

「素敵でも何でもない標準装備だそれ」いや待て……、まさかこいつ！

「私はあのときに言つた恩田くんの台詞が、伊達や酔狂じやないつてことは信じてこるけれどね」動搖しまくつてゐる僕をよそに、桜

庭は淡々と話しを続ける。「これは誰にも公表するつもりはないから、だから恩田くん彼女のことをお願いね」

「はいはい、わかりましたよ」

「あ、でも流出することはあるやも。しかもワールドワイド」「不肖、恩田崇、江戸川・フルフル・莉鈴に突貫したいと思いますっ！」

「良い返事」殊更満足げに頷いてから、桜庭は携帯を制服に仕舞い込む。「じゃあ、私はこれで。彼女と良いシエスタを……」

上機嫌の桜庭が廊下に消えるまで見送り（ちなみにこれ、桜庭がまた何かやらかさないかという監視を踏まえた上で見送りだ）、僕は机の横にぶら下げられた弁当を取る。と、そのとき聴き慣れた着信音が制服から漏れる。それは桜庭からのメールだった。

『きつと彼女、恩田くんのこと待つてたと思つ。これ女の感。天気予報と同じくらい信用しても良い』

「随分と当てにならない感だな」僕は笑つて携帯を閉じる。さてと、じゃあミッション開始と行きますか。

弁当を携えた僕は江戸川・フルフル・莉鈴、いや莉鈴の席へと歩いていく。そして、僕の気配に気づいた彼女は、いやもう気づいていたのだろう、桜庭と二人で見たときの彼女のその澄ました表情はそのときには既に消えていた。

「待つていたぞ、すけあくろー」子供みたいな邪氣の無い笑顔で、莉鈴は僕を迎える。

「何でずっと一人でいたんだ？ それに莉鈴、お前弁当は？」

「莉鈴が一人でいたのも、弁当を食べないのも、お前を待つていたからに決まっているじゃないか」

ふと、桜庭のメールを思い出した。と、同時に微かに体温が上昇するのがわかつた。

待つていたのかこの僕を、

君を血まみれにしたこの僕を、
君を血まみれにしても尚、

僕にそんな言葉を、
僕にそんな笑顔を、
君は僕に向けてくれるのか。

「本当に、待ち焦がれていたんだからな
「ん、悪い」気がつくと鼻の頭を搔いていた。
「ずっとずっと、莉鈴は待っていたんだからな」

「ごめん」

「じゃあ、いただきまーす！」

「じゃあ、はい召し上がれ～、つて……」

え、莉鈴さん？

今、何と？

何と仰いましたか？

「おおっ、タコさんワインナーは弁当の定番だな！ なあなあ、す
けあぐるー、厚焼き玉子の味付けは塩？ それとも砂糖？」
莉鈴さん、僕の弁当にむしゃぶりついてました。
莉鈴さん、僕の弁当にむしゃぶりついてやがりました！

プロローグでないメランコリー 6

僕は、魔術師の手によつて獸を宿された。

自らも獸と称した銀色の魔術師は、その銀色に輝く自身の相似形を僕の右手に刻印し、獸の正体を暴く魔法の言葉を僕の耳に吹き掛け そして僕は魔術師そのものになった。

僕に宿された獸は、それを呼び起こすことに抗うことのできない、快樂という名の毒を牙に湛えていて、ときどき滴り落ちるその毒は緩慢にしかし確実に僕の身体を蝕んでいった やがて僕は、獸を呼び起こすことに何の銜いも覚えなくなつた。

これが、僕と江戸川・フルフル・莉鈴とを引き合わせる切っ掛けとなつた大まかな経緯である。

存外にして外連見のある表現になつたけれど、致し方ない。

夏休みの話しだ。

あれから一ヶ月と少し。

江戸川・フルフル・莉鈴との出会いに至つては、一月も経つていな。

ことの顛末を詳らかにするには、僕にはまだ時間が必要だということはわかっている わかつてはいるのだけれど。

「なあ、すけあぐるー。莉鈴は用見うどんとプリンが食べたい」

こう邪氣の無い笑顔を見せられて、物腰が日和つてはいる彼女を目の当たりにすると、まあ色々と思つことが無いわけでもない。

「僕の弁当を奪つた拳句、まだお前は食ひ足りないのかよ……」

だから、そんな僕は莉鈴に悪態をつきながらも財布の中身を確認していたりする。

なんだこれ、レシートしか入つてねえ……。

平氣で下手をやらかすうつかり者の姉を素直に呪いつつ、莉鈴のために小銭を漁るのはもちろんやぶさかではないわけで。

つまり、有り体に言うならば 恩田崇は江戸川・フルフル・

莉鈴に感謝しているということだ。

獣は赤い竜に助けられた。

赤い竜に獣は許された。

だけど、そうした押し付けがましい僕の気持ちを莉鈴は_{おもんばか}慮るわけでもなく、

「何だ、すけあくろー。金が足りないのか？ だったら莉鈴は良い。お前の好きなものを食え」

と、自分のことは顧みないで僕のことを気にかけるのだ。

まったく、これじゃ僕の立つ瀬が無い。

「じゃあ莉鈴こうしよう……、お前が月見うどんとプリンを頼む、だけど月見うどんとプリンを食べるのは、僕とお前だ」

「おお、良いなそれ。共食いつてやつだな？」

「まあ、莉鈴が伝えたいことは何となくわかるけれど」僕は苦笑を浮かべて、椅子から腰を浮かせた。その苦笑が照れ隠しを伴つていたのは、言うまでもない。「割り箸とスプーン、二人分貰わないとな」

昼休みが半分ほど過ぎたにも関わらず、学食の空席は相変わらず皆無だつたけれど、そこに立っているのは僕くらいのものだろ。テーブルに座つている生徒たちの視線が、僕と莉鈴とを交互に向いているのが気配でわかつた。何というか恥ずかしいものがある。と、いうか 廊下で席待ちをしている生徒たちの視線がクリティカルに痛い。だつたら譲るなよ、と非難をしたい心持ちはある。確かにそれはあるのだが。彼らが列を譲つたのは僕のためではもちろんないし。あのA定食を完食はおろか、あまつさえ箸もつけていないうな状態でカウンターに持つていく羽目になつた某生徒の英断は、もちろん僕のために下されたものでもない。ようするに、彼らを非難する立場に僕はいないわけだ。そう、まるでお嬢様に跨がれた馬になつたような気分である 跨がれたから仕方なく来たようなものです。どうかそんな目で僕をねめつけないでください みたいな。やるせない。

そういつた僕と莉鈴との温度差をダイレクトに肌に感じつつ、僕はカウンターに身を乗り出して頬杖をつきながら月見うどんとプリンを待っていた。

「とりあえず頑張んなさいよ」などと、なんとも恣意的で、ある意味鬱になりそうな励ましの言葉と一緒に、学食のおばちゃんが丼に卵を一つ落として、それから僕に月見うどんとプリンが載せられたトレイをおもむろに差し出した。「女の尻に敷かれるくらいが丁度良いって、おばちゃんは思うんだけれどね」

「エスパーですか？　あなたは……」

ど。

僕が苦笑を浮かべたそのときである。

「見たぜ～、眼にドリルで穴を穿たれるくらい見ちまつたぜ～？」

聞き覚えのある声とともに、ふと、右肩に圧力を覚える。

思わず振り返られずにはいられない。

「ちよつ、お前……、桜庭と一緒にじゃ

「一進数――！」

そんな意味不明な雄たけびを認識した瞬間　両目に激痛が走った。

！？

「いつつつつてえええええつつつ――！」

「をおおおおお！？」

指が勝手に目蓋を塞いだ。

暗転した視界に光の残滓が散逸する。

痛みは直ぐに引いた。

ゆっくりと目蓋を開く。

視界が広げた先には。

ぼんやりとした境界が鮮明になつたその先には

「とんでもないことをした。今、凄く後悔している

僕に土下座をしている幼なじみの姿があつた。

土下座といふ殊勝な態度をとつてゐるありすに反して、僕の心中は安穏としたものではなかつた。ぶつちやけ 憤懣やるかたない心持ちである。しかし、これ以上衆目に晒され続けられては辛いものがあるのもまた事実だ。僕はやんわりとありすに立つように促しそれから紳士的に彼女の手をとつて補助を努め、彼女が立ち上がつた旨を確認したあと、スカートの埃を真摯に払つてやつた。

ありすを元いたテーブルへ僕がエスコートしている間、彼女は終始うつむきっぱなしだつた。凹んでいるのではないあいすはこの上なくリノリウムが好きなのだ。と、自己暗示。そうでもしないとやつてられない むしろ僕がやられてしまつ。精神的に。

「ゆるひてくれりゅ？」

席に座るや否や、ありすは瞳をつむりながら追い討ちの懇願。衆目にプラスの補正効果。

説明するまでも無い。月見うどんとプリンが載せられてゐるトレイを、己の胸元に手繰り寄せているあの食いしん坊だ。「すけあくろー、こいつ泣いてるぞ。許してやれ」

「仕方が無い」やれやれ、と僕は深く嘆息する。「次からは少し手加減してくれ

!?

僕の含蓄のある言葉尻に、ありすの泣きつ面の顔が変化の予兆を見せる。

ほら見たことか あいつは本音を突つつかれると右の眉が少しだけ吊り上がる。

もつとも、僕しか知らない僅かな変化だけれど。

「わざとじやないもん」唇を尖らせながらありすは言つた。「祟を驚かせようとしただけだもん」

僕は静かに黙秘を貫く。

頬を突つつけうとしただけなんだもん。
狙つてやつたわけじゃないもん

「なあ、すけあくろー？」

莉鈴の声に、僕は視線だけを動かす。彼女は小首を傾げて所在無さげに割り箸を宙に停滯させていた。

そもそも頃合か 僕はもう一度だけ嘆息をして笑顔を取り繕つ。
さあて……、
ありますさん。

月見うどんが伸びきつてしまつ前に、ヒツヒケリをつけよひづ
やないか。「わかつたよ」

「わかつてくれた？」僕の柔軟な物腰に破願一笑するありますさん。
「ああ、わかつてゐるわ」僕はそんなありますさんに鷹揚に頷いた。

そして、

「お前に悪意があるのは充分わかつてゐるんだ」ノノヤロー！ 今度こ
んな真似をしたら本氣でぶつとばすぞ！！」
と、毒づいた。

一瞬の静寂。

それを振り払つよひに、ありますはツインテールの髪をぶおんぶお
んと搔き乱し席から立ち上がる。固く握り締められた左右の拳が、わ
なわなと震える振動を全身に加速させている。彼女の白い皮膚が少
しづつ激情の色に染められていくのがわかる。不機嫌オーラが静寂
した空気を綺麗にラッピング。羞恥に結ばれた唇なんて酷い有様だ。
ほらほらありますさん本音がだだ漏れていますよ。

空氣に触れて酸化した真つ赤な真つ赤な鉄臭い本音がね。
そう僕がほくそえんだ瞬間。

空氣が 爆ぜた。

「だからあればフランクだつたんだつてば、意地悪ー！」

「お前はまじうことなきフランクだよ、性悪ー！」

うきにににいにいにい！

食堂に木靈する一いつのハーモニー。

額の皮膚を重ね合い沸き上がる感情を擦れ合つ、幼なじみ一人。

そんな僕たちを、不思議そうに見上げる莉鈴さん。

そして、につこりと交互に箸を動かして彼女は言った。『お前ら

仲良いのな』

悪いわ！

恩田崇と夢枕あります。

そんな

どうしようもなく噛み合つて、

どうしようもなく噛み合わない一人だった。

夢枕ありす。

幼なじみである。

幼なじみ この言葉を聞くと世間は典型的な類型（有り体に言えば漫画やアニメに登場する幼なじみキャラというやつだ）を往々にして想像してしまいがちだけれど、しかし、世界広しといえど、本気で殴り合いの喧嘩をした幼なじみは僕とありすくらいなものだと思う。それを鑑みてみれば、世間の妄想に近いそんな関係に相対して、現実が期待値を上回ってしまった好例といえるかもしれない。なにをいわんやあにはからんや。

夏休みの話しだる。

僕という原罪に触れ、闇の奥深く 精神の深淵に抑圧された大罪を地上に曝し出すことになった一人。

ありすが曝し出したのは 嫉妬。

彼女もまた悪魔に魅入られた一人である。

悪魔に魅入られたが故に、彼女もまた悪魔に憑かれた。

嫉妬に比肩する悪魔は リヴィアタン。

そう。自らをリヴィアタン（いたとか語弊あり）と称する悪魔と僕は対峙したのだ。

あつはーん 呼ばれて飛び出てシャラララーン 嫉妬の権化リヴィアタンがあ、祟きゅんの心をひねつて捻つて渦巻いてあげる

はい回想終了。

だつて仕方ないじやん。

所見での衝撃だぜ？

思い出すのが辛すぎるつてーの。

ありすが馬鹿なのはもちろんわかっているけれど、なんというか

馬鹿のベクトルが違うつていうか……。

「あによー」

嘆息してありますを改めて見る僕に、彼女は抗議の視線でそう応える。

「いや、あいつもありますなんだなって……」「はあ？ 意味わかんない」

さつきまでの険悪な雰囲気はどこへやら、ありますは僕たちと同席するのが当たり前というふうに綽々とした態度をとつていた。あまりたべ割り箸まで握つてゐるオマケつきだ。

「お前、桜庭と一緒に昼メシ食つんじやないの？」僕は、ありますから割り箸を奪い返す。「とにかく食糧不足に備へてるんだ。お前に恵んでやる余裕は無い」

そんな僕に、ありますは頬を膨らませるとこつ仕草で応えた。

「なあ、すけあくらー。つどんが伸びてしまつた？」

「ああ、悪い莉鈴。それじゃあ食べようか。つと その前にトレイを僕の方へ近づけてくれ。このままじゃ僕の腕が伸びきつてしまいそうだ」

莉鈴はこくりと頷いてトレイに手を掛けた。「ほら。すけあくらー、受けとるが良い」

「献上の呪しかと承つた」

そう言つて手を伸ばしたのは僕ではない。ありますだ。

恭しくトレイを受けとろうとするありますのは頭頂部に、すかさず拳骨をお見舞にする。軽快な殴打の音と共に、星が散りばめられたのはきっと錯覚だろう。じぶじぶとした違和感に苛まれた眼球は、まだ皿蓋に優しくされたいと思つてゐるらしい。

「何すんじやー！」

「それは僕の台詞だ！」僕はありますに怒鳴つてからトレイを引き寄せた。「まったく……、油断も隙もあつたから、僕はありますに皿潰しをお見舞いたれただけだぞ。

「別に食べようとしたわけじやないもん

「じゃあ、どうするつもりだつたんだよ？」

「食べさせてあげようと思ったの」

「は？ 誰に？」 僕は訊いた。

「誰についてゆーか」 唇を尖らせたありすは、上目遣いで僕を見つめる。黒に比重を置いた眼球が右往左往。どうやらありすさん何かを逡巡している様子。それからややあつて小首を傾げながら彼女は言った。「ステンレス製の胃袋を持ったときどきウェットな人？」

「それたぶん人じやないし！」

もしかして、捨てるつもりだったのかよこいつ……。

だつたら尚更たちが悪いじやないか。

ささやかな疼痛を覚えた僕は、思わず額に手のひらを当てる。

「毎にお前と会うのは久しぶりだけど。それにしたって、いたさか悪戯がすぎやしないか？ 例え幼なじみといえども 分別を忘れた悪戯は可愛くないぜ？」

まったく可愛くない。

僕にだけ被害が及ぶなら我慢もできるが あのときの土下座にしたつてそうだ。他人を巻き込みすぎる上に打算があけすけなんだよ。

まあ、ありすのその傾向も昼休みに姿を現さなかつたのも、いざれにしろ僕が起因しているのは概ね理解はできる。でも僕がいけ好かないと思つた以上、ここは訂正して然るべきだろ？ 幼なじみとしてのささやかな配慮だ。

僕が業腹だという癖サイイをありすに送る。

「でも」と。そこでありすは唇を固く結び、それからおずおずと言葉を続ける。「『めんなさい』

「他人を巻き込むのは、これで最初で最後だ」

「うん」

「約束はできる？」

「うん」 ありすは懇懃に首肯する。「今度からは祟だけにするね

いつか刺されちゃうかもね僕。

そんな洒落になりそうもないジョークは腹の奥底に仕舞つて、僕は「うん、まー、そうね」と適当な相槌を返す。まあ、ここまでが現状でとつうる最適の妥協案といったところか。本当は色々と訂正したいんだけどね。

ヤンデレありますさんはあの夏でもう懲り懲りだ。

ちらちらと莉鈴に目配せをするありますを、苦笑混じりに僕は眺める。

ありますの中にいた悪魔は消えた。

でも、消えたからといってそれはいなくなつたわけではなく。僕の中にいた獣と同じように、彼女のそれもまた自身の一面にすぎない。僕たちが死に至らない限り、そいつらは決して消えることはないのだ。認めるか認めないか　この明確な差異が悪魔を手懐けるコツだと僕は思う。認めた上で、それを受け入れるか否かは個人の勝手だけれど。少なくともありますはその両方を肯定した。まあ、だからこそ今のありますが継続中なわけで、奇しくも僕は十数年のときを得て彼女の本物にお目にかかつたわけだ。まったく頭の痛い話になるのだけれど、こればかりは仕方が無い。愚鈍な自分を呪うしかなかつた。

それにしても　あの夏に出会つた他の連中といい、それに桜庭にせよありますにせよ、どうして僕の周りには腹に一物を抱えた人間が集まるのだろう。

ど。

僕が思索に耽よつとしたそのとき。

ふと、朝のホームルームのことが頭を過ぎつた。

そういえば……、あのとき会話した莉鈴つて黒い方の奴だつたよな。

「ん、どうした？　莉鈴の顔に何かついてるか？」

「うどん汁がしどどひこでるよ」

「ん、そうか。すけあくろー、悪いが拭いてくれないか？」

訥々と評価を下した僕に、莉鈴はさもありなんとばかりにテープルから身を乗り出して顔を近づける。莉鈴の腕に挟まれているように佇んでいるのは、あれだトレイというやつだ。丼の縁にはうどんの切れ端がでろりと飛び出ておりその先端から何やら汁を出して、溺れかけた人間がぐつたりしている感じに見えるのは、何だ僕の妄想か？

「あ、あの莉鈴さん 今何と？」

「拭いてくれないか？」と莉鈴は言った

「いや、そんな小説の一文みたいなやつじゃなくて……、今何て僕は言つたかって、僕はそれを訊きたかったんですけど……」

「？ 可笑しなやつだな」

「あ、あ、あたひが ふふふふいてあげゅつ！」

「ん、そつか悪い。お前優しいな」

「きやきやきやきやん違いしにやいでよね！ よね！ 別にあんたによために……、あんたにやんかのために、やりゅんじゅにやいんだかりやつ……！」

りや ！

そんな雄たけびに、混濁した思考が次第に鮮明になる。

どうやら僕は正氣を失っていたみたいだ。

ドラマグラでも読み耽つていたのだろうか？

いや違う。ここは学食だ。僕は昼メシを食いに来たのだった。確か僕は莉鈴のリクエストに応えて。

月見うどんとプリンをおばちゃんに注文して。

それからありすとすつたもんだして。

卵を二つのつけてもらつて。

それからありすとすつたもんだして。

え？

「あの莉鈴さん。僕の、僕たちの用見つぶんは？」

今度こそ本氣で冷静になつた。

いつの間にか莉鈴に引き寄せられたトレイをぼんやりと眺めいや、直視できない。だつてそつじやないと確実に僕は死ぬ。

「ほひるほひへなひふあらふつふえふいふあつふあぞ」

「た、祟つ。じゃ邪魔しないでよね！ わ、私だつて好きでこんなことやつてるんじやないんだからつ！ 別にあんたに触れて欲しくないつて思つてやつたわけじやないからそこんとこ勘違いするなあつ！」

ありすの捲くし立てのよつた剣幕はともかく、莉鈴の言葉ははつきりと聞き取れた。もはや言葉としての体裁は皆無だつたけれど、莉鈴が何を言わんかは手に取るようにわかる。わからいでかつ。

「どうか わつきまで顔についてたじやん！」

おびただしいまでの「うどん汁」がああ…！

半ば生ける屍と成り果ててしまつた僕は、さらながら死人遣いの操る魔力で引き寄せられるかの如く、ゆらゆらとトレイを招き寄せる。

それから丂を恐る恐る覗き込んだ。

旬を終えたプールの姿がそこにはあつた。

言葉が出ない。

魂は出でているけれど。

どうやら莉鈴と再会した時点で、僕と蜃メシの因果は断ち切れてしまつたらしい。まあ、ありすとのやつとりに集中していたので、こうなつたのは仕方の無いことだけれど、そんなことをぼんやりと考へながら深く呼吸をする。

「ほら莉鈴、『デザートだ』プリンが入つてゐる容器を、僕は莉鈴に差し出した。

「すけあぐりー、食べないのか？」

「いや、僕はもう良いです」

「じゃ、じゃあ」「うどん汁が染み込んだハンカチをひらひらさせながら、ありすは言つた。「あ、あたひが食べゆつ

「もつ好きにして」

椅子の背凭れに腰を沈めて、僕は天井を仰ぎ見る。氣だるさはまだ身体に充填されたままだつたけれど、不思議と悪い氣はしない。笑い話の種になつたと思えば安いものだ。

すけあくろー、か。

ふと夏休みの風景が、僕の眼球を通して天井に投影される。

ねえ、ねえ。かかしくん。

いや水色さん……、僕は崇ですつて。

「ねえ 崇さあ？」

「何だよ?」「目蓋をきつく閉じたあとで、僕はありすを見る。

「どうしてこの娘、あなたのことを、すけあくろー、って言ひの?」

目蓋に焼きついた人影は消えない。

「たぶん」「瞬きを数回繰り返して、僕は人影を記号に変換する。

「水色さんに関係してるのかも」

「関係してるのかもだつて?」

まつたく……。

存外にして歪曲な言い回しじゃないか。

笑えてくる。

「ふうん」ありすは頬杖をついて僕を見据える。「村上先輩ね。すけあくろー、か。ああなるほどね」

「何だよ?」

「何でもない」ありすは嘆息をして椅子から腰を浮かせる。あたかもその場から逃げようとするよつこ。

あたかもその言葉が取り繕つたものだと言わんばかりに。

「さてと、あたしは灰霧かいむのところに行こうとするかね」と、ありすは一人ごちる。

「昼休み終わりそだけど?」

「なあに「にんまりと破顔してありすは言つた。「オレサマオマエ

マルカジリつてね。お弁当なんかもの三秒で沈めてみせるぜつ。

はつはつー

「僕にも分けろよ」

「やだ」

僕が舌打ちをする暇もなく、ありすは身を翻し廊下へ走つていつた。

振り子みたいに揺れていのシインテールを田で追つたあと、僕は莉鈴の方へ振り向いた。

「じゃあ、僕たちも

そこで目的があったことによく気づいた。

プリンを食べていの莉鈴に、僕はその旨を伝える。

もちろん莉鈴は快諾した。

カラメルソースがひりついてる彼女の唇が、美味しそうに見えるのは僕の錯覚だろつ。

プロローグでやらないメランコリー 10

「不思議」 桜庭灰霧^{かいむ}はそう囁いたあと、栂を挿めて文庫本をそつと閉じる。「どうしてかしら?」

「ティンダロスの獵犬のこと?」

黒いセルフレームに人差し指を添えた桜庭は、不思議そうに首を傾げた。

「栂の位置」机に載せられている文庫本を、僕は顎で指し示す。「いま、そこいら辺じゃないの?」

「ああ」と、首肯する桜庭。「そうね。でも残念、恩田くん。私が話したいのはそれじゃない」

「あ、そう。そういう話しじゃないんだ」

椅子に腰を沈めた僕は、パンツのポケットに両腕を滑り込ませる。外に顔を向け、飛行機雲の軌跡を追つた。その僕の姿を、廊下の硝子が冷たく反射していて、細長い無数の影がそこに同化しようと這い寄つてくる。否応なく、一日の終わりを認識させられる瞬間。

放課後。

僕と桜庭は黄昏に沈んでいた。

僕が黙つていると、桜庭は再び文庫本を手にとり、そして俯く。桜庭が頁^{ページ}を繰る姿を硝子越しから大人しく眺める。

聞こえるのは、紙が擦れる静かな音と僕たちが繰り返す小さな息遣い。

そこはとても静謐^{せいひつ}に溢れている。

「それで、不思議つて一体何のことだよ?」

桜庭の横顔に見惚^{みと}れていた自分を認めたくなかった僕のその問いは、自然と蓮つ葉な口調になってしまった。思わず僕は硝子から視線を外す。

「うん」文庫本を閉じる乾いた音が空気に震えた。「どうして私たちには声が掛からないのかと思って。私にはそれが不思議」

「声つて、誰から？」

「決まつている」

と。そこで桜庭は言葉を切つた。

しばらく待つてみたけれど、桜庭はそこから言葉を紡ぐとはしない。僕は肩を竦めたあと、窓硝子を介して桜庭の様子をそつと窺う。桜庭は僕の横顔を眺めていた。両手を組んで、組まれた手の甲に顎を載せて、じつと僕を見つめていた。

「何だよ？」と、おもむろに桜庭のほうへと振り返る僕。もちろん、その口調は蓮つ葉なことこの上ない。

桜庭と視線が重なる。

それを合図にして、ペーパーナイフで手紙を開封したような、僅かに薄く開かれた桜庭の唇から静かな息が漏れる。仄かに甘い匂いのする吐息に思わず眉を顰め、からうじて拾い上げた桜庭の言葉をそしゃくして、僕は反芻する。

軽い疼痛を僕は覚えた。

こいつ本氣で言つてゐるのか、という気持ちが半分。

こいつなら本氣で言いそうだ、という気持ちが半分。

だけど、いざれにせよその言葉が桜庭灰霧という個性を如実に表しているのは明らかだった。冗談にしろ本気にしろ頭が痛くなるのは至極当然のことだ。

やれやれ、と僕は方を竦める。

「私たち、つてことはさ」嘆息をしつつ、僕は再び外のほうへと顔を向ける。「もしかしたら、僕もその中に含まれている?」

「当然」

「あ、そうつか」

まったく、やれやれだ……、本当に。

正直、頃垂れたい気持ちで心が一杯だ。

どうしてこんな奴を、僕は友達に持つたのだろうかと思つ。そう思いながら桜庭との馴れ初めを回想

苦笑。

ああ、そうだった、こいつはこんなやつだったな、と再認識。

改めて桜庭の漏らした吐息から件の異物を抽出する。

ああ、ヤバイ笑えてきた。

やっぱ本氣で言つてるよこいつ。

まったく……、甚だすっぱいことこの上ない。

桜庭灰霧が転がした果実。

僕が拾い上げた異物。

それは。

秘密結社だった。

「 どう思ひづか？」

「 いや良くわからない」

課外活動申請書と銘うたれたB5サイズの用紙を凝視したまま、僕は桜庭の質疑に応答する。もつともそれまでの間に、僕は思い出へと旅して一時的な停止状態へと陥っていたわけで、桜庭の言葉（例えそれが文字列にしろ周波数にしろ）に反応するにはそれなりの時間を消耗したはずだと思つ。まあそのおかげで僕の精神はトリップすることではなく、桜庭の提示した言葉を理解し尚且つその意図を汲むことができ、結果僕と莉鈴が置かれているこの不可解な状況を冷静に分析できたというわけだ。しかし分析はできても、やはりわからぬものはわからないのである。桜庭が何をやりたいのかはわかるけれど、それについての感想を求められても、もう僕にはわからないとしか言いようがなかつた。

そう。

秘密結社への入会 それが、僕と莉鈴が実習棟へ呼び出された理由だつた。

そういうわけで実習棟である。

僕と莉鈴は、桜庭の半ば脅迫じみた提案に従つようにして実習棟のとある一室に腰を据えていた。一時期コンピュータ研究会として名を馳せていたこの部室も、今ではタワー型のパソコンが一台とそこに傾いているキーボードを残すばかりではや見る影もない。かつての喧騒、いや打鍵はどこへやらだ。いやなんでも N島といふ一年生が悪魔を召還するプログラムを開発したおりに部室が半壊しその責任を問われて研究会は解散した、と生徒の間では真しやかな噂が流れているが どうだろ。真偽のほどは定かではない。

「まったく、根も葉もない噂。コンピュータ研究会は部へと昇格して、ただ単にお引越ししただけ。ゲームのキャラクターを使って勝

手な妄想はしない」

「妄想なんてとんでもない。これはオマージュですよ、桜庭さん」などと意味のないやり取りをしつつ、僕は壁に掛けられている時計仕掛けを盗み見る。

分針は見事に前進していた。

なるほど僕が放心していたのは十分弱か。

B5サイズの用紙に記されている文字列を改めて確認し、僕は軽く咳払いをする。

「つまり桜庭的には　声を掛けられないならつべつてしまえ、という発想なんだよな?」

「(1)名答」

「で、課外活動として申請する腹積もりなんだぞっと、桜庭はそういう発想なんだよな?」

「的確すぎて賞賛する言葉も出ない。でもね、同時につまらなく思つたり」

いや、あんなものを思い出したらな　ていうか。奇を衒つた答えを導き出すほうがよっぽど難しいわ!

一体、僕に何を求めているんだお前は

「秘密結社とは何だ?」半ば不意を擊つ形で、莉鈴は僕の肩に顎を載せてきた。

「え　それはまあ、フリーメイソンとかシオン修道院とかの団体、だよな?」

「概ね合つてこる。でも有能^{アリタマツク}でつまらない受け答えね　嫌いになりそう」

「どんだけ僕に高度な受け答えを期待しているんだよ」

「せめてフリーメイソンをフリーメイソンリーと呼ぶくら^コにはああ。

つまり、個人と団体とを混同するなつてこと。細かいなあ。

ちなみにフリーメイソンは個人を指す呼称で、団体を指す呼称が

フリー・メイソンリーらしい。

「しかし」 桜庭に向けられた視線を切り、僕は莉鈴を一瞥する。眉根を寄せる。そんなストレートなリアクションを莉鈴は維持していた。「有名無名いざれにしろ、名前を挙げただけじゃあお前はわからないよな?」

「ああ、わからん。さつぱりぱりぱりだな」「ですよね。

一般的な用語じゃないもん。

それに加えて、興味本位で調べた程度の知識しかない僕には、名前を挙げるくらいが関の山だ。漠然とそれが何なのかは概ね理解しているけれど、莉鈴にわかるように説明するのは、とてもじゃないが僕にはできそうもなかつた。だから莉鈴があんな顔をするのは、まあ無理もない。

再び桜庭へと振り返つた僕は、お前が説明しろよな、とそんな意味合いを含めた露骨な視線を彼女に送る。

「面倒」

露骨に厭な顔しやがつたよこいつ。

「せめてどんなものくらいかは説明してやれよ。僕の知つている桜場ならそんなの簡単だろ。僕じやあ無理だ知識が浅いからな」とりあえず桜庭さんを持ち上げてみる。

しかしそれで上手いくかどうかは桜庭次第だ。
こいつ変なところで気まぐれおこすからな。

僕は黙つて桜庭の様子を窺う。レンズの奥からは芳かな色は見られない。

やれやれ、もう少しだけ桜庭を持ち上げてみますか。

かつて魔法使いだつた僕の高度な呪文を譜んじてあげよう。盛り上がること請け合いだ。

これで反応が無かつたら仕方がない。

「桜庭さん?」「

囁き……。

「よいショッ！」

詠唱……。

「頼むぜオカルトクイーン！」

祈り……。

「 来たか？ 来たか？ 来たんだろ来たんだよなあ！？」

念じろ！

「 やりいでかつー！」

ハイになつた。

もちろん僕ではなく桜庭が。

瞬間、レンズ 桜庭の眼鏡に照明が反射した。

おおつ！？

その光景にただならぬ雰囲気を察知した僕と莉鈴は、思わず歓声を上げその声をハーモニクスさせる。

「仕方がない」腕を組んだ桜庭は不敵に笑う。黒いセルフレームに添えられた人差し指が妙に心強い。「では、フリーメイソンリーを例に挙げて、江戸川さんの疑問を詳らかにしようと思つ」

「頼むぞ桜庭」

スイッチが入った桜庭を見て、僕は安堵の拍手を打つ。正直、片足を突っ込んでしまつている僕としては、この手の話しさはまんざらやぶさかではないと思つてゐる。というより寧ろ期待さえしてゐる。桜庭の蘊蓄うんちくはそれはもう大したものだからな。オカルト 暗黒情報には事欠かない。それが桜庭灰霧おんなの という存在である。まあ秘密結社なるものがそこにカテゴライズされているのは、いささか偏見気味ではあると思うのだが。しかし物事を広義でしか認識できないのは往々にしてあるものだ。まあこれは桜庭の受け売りではあるのだけれど……。

おもむろに椅子から腰を浮かせた桜場は、クリアボードに向け歩を進める。それから振り返つてひとくさり僕たちを見回したあと、首肯してからマジックを握る。白いアクリル板に黒い線が描写され、やがて二次元のピラミッドが構成される。

「ああ、あのシンボルーマークか

ピラミッドの中心にある異物を視認し、僕はぼんやりと呟いた。

「江戸川さん見える?」

「莉鈴のことは莉鈴と呼んで良い エット」

「桜庭灰霧。灰色の霧で灰霧。私のことも灰霧で良い」

「そつか。じゃあ灰霧よろしくな」

「よしなに」

「ところですけあくろー、見えないんだが」

ところで莉鈴さん、灰霧ではなく僕に声を掛けてくる。さっきの莉鈴と桜庭のやりとりで得心した僕は、おずおずと慎重に顔を莉鈴に向ける。向けるが、如何せん距離が近すぎて莉鈴の体温が僕の鼻先を翳^{かす}める。といふかこいつまだ僕の肩に顎を載せていたのか。あまりに自然すぎて気づかなかつたよ。まだ耳がこそばゆい。

「莉鈴、離れれ」莉鈴から顔を遠ざけて、僕は言った。

「わかつた。じゃあ今度はすえあくろーが、莉鈴の肩に顎を載せれ「どうしてそうなる?」

「借りたものは返さねばな」

「バカツップル」そんな軽^{あま}きに僕は慌てて振り返る。桜庭さん、どうしてか目が据わつていらつしやる。「ちょっととした知り合い、ね。その言葉の認識を私は改めるべきなのかもしれない」

「ち、違うんだ桜庭」

「否定してもらつては困る。証拠は拳がつてるのよ、恩田くん」

「え 証拠つてお前まさか……」

「良い写真^えが撮れたわ」ふふん、と桜庭はせせら笑い。手にした携帯電話を撫で擦る。「恩田くんと莉鈴さんがペルシャーしてるとこ」

「いや、桜庭さん。事実を捏造しないで下さい。鼻先がちょっとだけ触れ合つただけだろ?」

「いや、私からは見えないし」それに と桜庭は言葉を結ぶ。」

「歴史は勝者が刻むものだから」

「どんだけ暴君なんだよお前は。とりあえずそれは消去してくれ。万が一ありすにでも見られることがあつたら命が幾らあつても足り

ないからな。そいつだけは本氣でヤバイ

「私もそつ思う」桜庭は懇懃そうに首肯する。

「取引材料にしては

いたさかスパイズが効きすぎている」

黙々と携帯電話を操作している桜庭を見守る。

「さて仕切りなおし」携帯電話を制服のポケットに仕舞う桜庭。「どこまで話してたつけ？ フリーーメイソンリーが大工の集団を起源とした秘密結社である、という件辺り？」

「はしょつてるんだかいないんだか微妙だなそれ まあ桜庭はとりあえず何も喋つてねえよ」

「もうぶつちやけ面倒」

「何故にいきなり機嫌を損ねる？」

「わからない。でも、興ざめであることは明らか」そう言ひて、桜庭はセルフレームに人差し指を添えて小首を傾げる。本当にわからない、そんな不思議そうな表情だつた。「まあ気が向いたらいすれ話してあげるわ。」ごめんね莉鈴さん？」

「うむ、灰霧がそう言つなら仕方がない」そう莉鈴は頷いて、それから僕が持つているB5用紙を取り上げた。「とりあえず莉鈴は、これに莉鈴の名前を綴れば良いのだな？」

まあそれが目的だからな、と僕は心の中で相槌的な言葉をつくる。「しかしこんな怪文書じみたもの実際通るのかね」

「びっくり」そんな言葉に僕はB5用紙から視線を外して、桜庭を見た。首を掴まれた猫みたいに瞳を大きく見開いている。「恩田くん、それは乗り気な発言だと私は受け取るけど？」

「賢しいなお前。だけどもちろん乗り気じよないよ、こんな出鱈田な申請じやな。でも、まあ僕の選択は多分間違つていないと思う。僕をだしにして呼び出した過程はもちろん気に入らないけれど」そこで僕は一呼吸置いた。ふと思考にさらさらとしたノイズが混じる。教室の隅で黙々と頁を繰る桜庭の姿。ああ、そうだったけ 声を掛けたのは僕が最初だつたな。「しかし アグレッシブな桜庭に従うのは悪くはないさ。どうせ帰宅部で暇なわけだし。で、僕たち

「はー一体何をやるんだ?」

「何で僕はこうお人好しなんだろうな？」

課外活動申請書を眇め見て僕はそう一人ごちる。

申請書に名前を明記した僕は、桜庭の言うがままに部室（かつて部室だった 場所だけど）を出て、実習棟と教室棟を結ぶ連絡路をとぼとぼと歩いていた。もちろん、桜庭灰霧と江戸川・フルフル・莉鈴の名もそこに連ねている。あとは桜庭の指定した場所へ僕が赴き、そして然るべき人物にサインと印鑑を捺印してもらえば、見事この申請書はその体裁を整えるというわけだ。しかし幾ら体裁が整つたとしても、この申請書のしょんぼりさは何ら変わることはない。いや寧ろ、下手に体裁が整えられることで、しょんぼりさが一層際立つのではないかと僕は危惧してしまう次第である。

今はまだ決めてない、これから考える じゃねえよ。きちんと計画を立ててから僕たちを呼び出せよな。

とまあ、心の中で桜庭にどう懇意をついたところで、結局は僕も同じ穴の貉である。半ばノリに近い衝動でサインをしたのは僕だからな。いやあ、どうして思い出つてのはこう蜂蜜みたいにだだ甘く補正されているんだろうね。桜庭を文学少女だと思つていたあのころ頃が普通に懐かしいよ。

突き当たりに差し掛かったところで、僕は中央にある階段の踊り場へと向かう。教室棟へ繋がる連絡路は三本通つているが、僕が歩いていっているのはその端っこ、東側にある一つだ。ちなみにここは地上一階。生徒達の間では『地獄』^{インフェル}と揶揄されている場所だつたりする。僕たち一年生がいる三階は『天国』^{バラディ}と呼ばれているから、まあこれはシニカルな意味合いを含んだアイロニー的な表現だらう。尖ったセンスをしている 嫌いじゃないけど。

職員室を抜け踊り場に足を踏み入れる。ステップに脚を載せて、
僕は煉獄^{ブルガトリア}へと続く階段を浮かんでいく。一階に辿りついた僕は右折

そのまま歩を進めた。『保健室』と白い文字で綴られているプレートを視認。ここを訪れたのは、入学して以来初めてのことだけれど、しかし保健室というのは僕の経験則からして普通一階にあるものじゃないのか？ 天国も地獄も、僕たち生きの良い人間にとつてはあまり歓迎できたもんじゃないってことかね。どうせなら煉獄のほうがまだマシだと？ うーん、やはりこの学校からは全体的に尖ったセンスを覚えてしまつ 笑えてくるくらい嫌いじゃないけどね。

僕は、保健室の隣りにある部屋の前で立ち止まつた。白い文字列がひしめきあうプレートを見上げ、改めてB5用紙を眇め見てひとくさり躊躇する。ハブられるのはほぼ確定事項だけれど、ここまで来たからにはもう試して見る以外に僕に選択肢は無かつた。

ええいっ……、ままよ

スライド式のドアをノックする。

数にして三回 完全無欠の完全数。

しかし返事は無い。

「どうやら僕は屍になつたみたいだ。僕の前頭葉にゾンビパウダーを振りまいたのは一体誰だ？」

などど、辺りを見回しても誰もいない。当たり前だ今は放課後だからな。何というか色々な気まずさを抱えた僕は、とりあえず軽く咳払い。再びカウンセリング室のドアを眺める。

今頃の時間なら職員室にいるか、それとも帰つたんじゃね？ そんなテロップが蛤蠅なめくじみたいに愚鈍に思考を這いついたけれど けれども僕はドアの取つ手に指を掛けていた。

それが当然みたいに。

そうすることが必然のよう。

さながら当たり前のように。

さながらうつてつけみたいに。

そのドアには鍵が掛かつていなかつた。ドアがゆっくりとスライドする。

また。

また僕は
な気がする。

迂闊にも、触れてはいけない因果に指を絡めたよう

「この学校にあるどこの空間よりも、ここはその趣を異にしていました。^{おもむき} 有り体に言えばプライベートな空間といったところか。もしかしたら校長室がそれに近いかもしない。いや、校長室なんか僕は入ったことはないけれど。まあとりあえず寛げるようにはデザインされているように思う。もつとも、その対称がこの部屋の主だけに限られている気がしないでもないが。

主の性格が昇華され具現化された空間を、僕は再び眺めてみる。部屋の中央には黒い革張りのソファが一つ相対しており、ソファに挟まれる形で木製のテーブルが配置されている。テーブルの上には先ほどまで閲覧していたのである、数枚の資料が無造作に載せられていた。宮部現実 みやべじあむ とルビが振られている文字列を視認。恐らく、というかきっと東ノ園の生徒の名前に間違いない。そこから先はそれこそプライベートなものなので、意味の無い文字列として呼吸と一緒に空気に昇華させた。

板チョコみたいに整然と並んだ書架に近づく。ざっと見た限り力 ウンセリング室に相応しい書籍がそこには押し込まれている。ジークなんたら・フロイトやらカール・なんぢやら・ゴングやらだ。その数ある書架の中に『ライ麦畠でつかまえて』のハードカバーが紛れ込んでいたのは、僕たちに少しでも近づこうと試みたここの中の名残だろうか。とにかくきちんと分類しなさい とりえず背表紙を奥に向けて突っ込んでやつた。

やはり留守にしているみたいだ。主が不在の机を眺めて、もしかしたら、というそんな僕の妄想は嘆息とともにどこかへ搔き消えた。さて、これからどうしようか。職員室かそれとも実習棟か と僕が黙考しているとき、スライドするドアの無機質な摩擦音が鼓膜に伝播する。それからしばらくして、「煉獄に仔羊が一匹」と、いがらつぽいハスキーな女性の声が背中に這い寄ってきた。

肩に手を掛けられたような錯覚を覚えた僕は、そこに左手を当ておずおずと振り返る。白衣を羽織った黒いスーツ姿の女性と視線がかち合う。彼女は閉まりかけのドアを後ろ手で引いてこの部屋を完全な密室にする。そして、まるでそうすることが当たり前みたいに、ゆっくりと彼女は人差し指を僕に向けた。

「煉獄に仔羊が一匹だ」唇に当てた缶コーヒーの中身を音もなく嚥下して、その女性はプラスティックみたいな硬質な瞳で僕を見据える。「しかし少年よ、何も悲観することはないぞ。君が思っているほど地上はそんなに遠くはないからな」

明らかに笑顔とは程遠い表情だった。これらなら、ありすが持っているビスクドールのほうがまだ愛嬌があるってもんだ。つまり僕は歓迎されていないってことだよな。さつきの彼女のジェスチャーから察するに、僕の第一印象は『最悪』と烙印を押されたようなものだし。もちろん、彼女の台詞に至つては、『この部屋から出て、とつととお家に帰りなさい』的なニュアンスを含めた迂遠な言い回しだろうと思う。ふむ、彼女も中々に尖ったセンスを持つていらっしゃる嫌いがどうかはまだ評価し辛いけれど。

「すいません。鍵が掛かっていなかつたので……、つい」

「迷つた」頭を垂れようとした僕を、やんわりと右手で諫め彼女は言つ。「羊飼いの不在が、君にちょっとした懊惱を抱かせたわけか。悪かった少年。しかし僕もまた休息を必要とする身だ。とりあえず、ソファにでも腰を下ろして寛いでくれたまえよ」

「いや、あの……、勝手にこの部屋に入つたのを咎めていたのでは？」

「咎める？ 僕が君をか？」女性は小さく顎を引いて、眉根を寄せて瞬きを数回繰り返す。それから何やら得心したように彼女は頷き、口の端を僅かに持ち上げた。「僕の心とこの部屋は、同じ定義で繋がっているのだよ。部屋に施錠がされていないという状況は、すなわち僕の心が少年に対して開かれている状態であるということだ。だから少年、君が気に病む必要は一切ない」

「はあ、そうですか」少なくとも僕を苛む言葉ではなかつた事実に、
僕は安堵の呼吸を漏らす。

「座りたまえ」胸元で腕を組んだ女性は、僕をソファに座るよう頸で促した。「お茶でも淹れてあげよう。だが生憎コーヒーは切らしている。緑茶で良いか?」

「いや、お構いなく」

「君たちに構うのが僕の仕事だ」

と、彼女はそう言い放つて、立ち尽くす僕の横を通り過ぎようと/or>する。そして、僕の肩と彼女の肩が交差する瞬間、彼女の視界と僕の視界が死角に入ったその刹那、彼女が立ち止まる気配を僕の皮膚は貪欲に感じとつた。それから彼女は一言、「ふむ」と、たつたそれだけ。たつたそれだけを残して、彼女の気配は僕から遠ざかる。まあ心当たりが無いわけでもない。

僕に近づく全ての対象が該当するとは限らないけれど、それを目の当たりにしたら、やはり大よそ気分の良い代物では無いのは明らかだつた。思わずメランコリックに陥りかねない。そんな危険な要素を孕んでいるのが僕の性質アイデンティティである。しかし、悪いことばかりじゃないつてのが、せめてもの僥倖だと思つてもみたり。

「どうした少年? 浮かない顔をしているな」

「いや、冴えないだけですよ。気分はもつつきつきです。本当、月まで飛んで行きたいくらい」

「そんなに緑茶が好みなのか?」

「もう超好き」

ふむ、ありすが口にする分には問題ないけれど、いざ自分が口にすると恥ずかしいものがあるなこれあれ? 宇宙船射出装置は一体どこだつたつ? 月まで加速してみたいんだけど……。

「濃いのと薄いのと、どちらが好みだ?」

「濃いプロセスを希望します」

「変わつた物言いだな? 今の若者たちの間で流行つてゐるのか?」

「そりやもう 指恋と同じくらいメジャーですよ

嘘である。

恩田くん絶好調だ。脳を駆け巡る電気信号の流れは、シリアルスからおバカへと順調にシフトしていた。

ソファに腰を沈める。

テーブルに載せられた資料を裏返しにして、机に置かれた電機□ンロを眺めている女性を観察するセオリー。おっと、いけないなんちやら語を頭から排出しなければ。

彼女からもつとも目立つ部位を挙げるならば、僕は迷わずその首を指し示すことだろうと思つ。ボリュームのある栗色の髪は三つ編みで太く束ねられていて、恐竜の尻尾みたいに腰までぶら下がつてゐる。ちょうどアルファベットのしを連想させる形だ。つまり、腰まであるのが終着点ではないってこと。そう。しの字の軌跡は彼女の首をもつて初めてその終着点を迎えるのだ。

ぐるぐると まるで、本当にそれが恐竜の尻尾ではないかと勘違いしてしまつべからいに。

ぎりぎつと。

ぎしきしど。

みしみしど。

満ち満ちと。

狂狂と。

彼女の三つ編みは自身の首を絞め上げていた。

彼女の端正な容姿が震んで見えるくらいに、それは圧倒的な存在感を誇示していた。電気□ンロを眺めている彼女から覚えた一瞬の既視感はどこへやらだ。ふむ、宇宙船射出装置はどうやら僕の脳みそに埋め込まれていたらしい。きっと用までぶつ飛んだに違いない。ということで彼女の観察はすぐに終わつた。

しかし、目を逸らすのが何となく憚れた僕は、やかんが悲鳴を上げるまで彼女と一緒に電気□ンロをぼんやりと眺める。その折に、ネームプレートに見覚えのある文字列を視認したけれど、見ていない見ていな。心のモザイクをそのネームプレートに投射する。

変人はあれ一人で充分だ。いや、寧ろあれは存外にして変態の部類に当てはまるけれど。が、いずれにしろ僕はやはり触れてはいけないものに触れてしまつたようだつた。

今の僕の拳動を敢えて挑戦的に例えるならば 隣りのおねいさん
の胸部の膨らみにときめきを覚え始めた極々一般的で健康的な少
年 といったところか。

もちろんこれは、主観的な思考に反映された現実逃避である。も
し仮にこの僕の拳動を客観的に評価し得るならば、僕はすぐさま自
己の妄想に意義を唱えて、真っ向から先生のたおやかでゆんゆんと
した胸の膨らみをガン見するのは間違いないと思う。しかし、忸怩
たる思いを抱えながら尚、僕は主観的な思考に身を委ねることしか
できなかつた。僕の視線が現実に漂うのを拒否つていたからだ。拒
否つている上が故に、僕は図らずともキヨドつている。つまり初心
な少年を計らずとも演じている道化がこの僕なのだった。甚だ滑稽
なことこの上ない。それもこれもある変態外科医の先生が全ての起
因だ。とりあえず呪つてやひつ ドクロマーク。

「どうした？ 少年

「いや、ちょっと思考で指添を嗜んでいました。というか毒電波發
信中です」

いたさか常軌を逸脱した僕の言動にも関わらず、対面する先生は
怜俐れいりを彷彿とさせる無表情でお茶を啜つていた。苦笑を浮かべて、
彼女が入れてくれた緑茶を僕も啜る。

「ときに少年か

「はい何でしょう？」

「先ほどから僕の胸が気になっている様子だが」

「ぶつー？」先生からのクリティカルな指摘に、顔の穴かんばせという
穴から緑色の汁が吹き出る。

「そんなに可笑しいのか？ 僕の胸は 表情を崩さないまま先
生はこともあるうか、細身のシャツに拘束されても存在を強調し
て憚らない、たおやかでゆんゆんとしているその部位に右手を躍ら

せた。「そうか

僕もこの胸にはコンプレックスを抱えていてな

ありすが聞いたら発狂してしまうぞそれ。などと、冷静な評価を

している場合ではない。明らかに勘違いしているのは明白だ。まあ先生の指摘はあながち的外れではないのだけれど、だからって捨て置くわけにもいかないだろう。このままだと、緑色の汁に赤い汁が化学反応して僕のほうが発狂してしましそうだ。だって今、鶯が舞い降りてるんだぜ？ 先生のたおやかでゆんゆんなあれにさ。

「いや、あの……、僕が気にしていたのは、そのネームプレートなんですけど」

そんなに可笑しいのか、僕の胸は と、呪詛を呴きながら五指をわしわしと唸らせていた先生は、その動きを止めておもむろに僕のほうへと顔を上げる。疑問符を織り交ぜた先生の視線が皮膚に投射され、心臓は収縮と膨張を繰り返す。血液の流れは劇的に加速し、鬱血していた電気信号が体内を蠕動する。

「これがどうかしたのか？」眉根を少しだけ寄せて、先生はプラスティック製のそれを摘み上げる。

そして 思考の片隅で何かが爆ぜた。

両目が、文字列の認識を開始する。

夢野かのん。

と。そのネームプレートには記されていた。

ああ、とうとう見ちゃつたよ僕 どうしよう。

これじゃあ、思わず関連づけずにはいられないじゃないか。

脳内をリフレインする『おはいよー』の挨拶と一緒に某外科医の影に對面した先生を照らし合わせる。そして、僕は疼痛を覚えながら親近の物思いを彼女に重ねた。

「いや、素敵なものだと思いまして」などと、宇宙船射出装置の気まぐれに身を任せたくなる言葉を、僕はのうのうと譜んじる。

僕の心無い物言いにも、彼女は表情を崩すことがなかつた。少しだけ変化があるとすれば、唇にマグカップを運ぶ回数が上昇したくらいだ。きっと、咽が渴いているか、あるいは彼女の勘違いはまだ

継続中でそのことを気にしているかのどちらかだろ。

しかし、あのときの気視感は、やっぱり偽者じゃなかつたのか。

「そう僕は一人得心し、この場はお茶を濁す口を密かに心へ宣言する。

「や、それで少年。き、君が抱えている懊惱は、い、一体何なのだ？」

「懊惱ですか？」僕は一つの疑問に首を傾げた。「それよりも先生、なにやらどもつているみたいですが……、具合が悪いのでは？」
「ほ、僕は。ど、どもつてなどいない。ば、馬鹿者……。ぐ、具合は、そ、その……、良好だ」

否定された上に馬鹿者扱いされた。しかし、具合は悪くないみたいなので良しとする。良いのか？

「で、懊惱つて？」

「君が訊いてどうする？ まるで立場が違つぞ。君は懊惱を抱えて、僕の元へそれを吐露しに来たのではないか？」

「いや、僕は桜庭に頼まれて先生にプリントを提出しに来たんですけど」

「桜庭？」先生は顎に指を当てて、逡巡するような物思いに耽る。
「少年。君が言つてるのは桜庭灰霧のことか？」

「ええ、その桜庭です」

今までのやり取りで、何といつか先生の性格の片鱗を垣間見たような気がする。実直といつが、寧ろ天然と評したほうがしつぽり当てはまるな。まあ、先に用件を話さなかつた僕にも問題はあるのだけれど。自分の胸を異性の目の前で驚づかみにする人間はそうそういないし いや、たおやかでゆんゆんとした先生の胸は、おいておいて。

僕はテーブルを眇め見ながら、資料の隣にあるB5用紙に手を伸ばした。

それを反転させたあと、忸怩たる思いで先生の元へスライドさせ

る。

「先生に渡せば全ては十全に 桜庭はそう言つてました」
セラミックスのボールでなぞつた憂鬱をトレースしているであろう先生に、僕がここを訪れる際、桜庭に吹き込まれた希望的観測を空気につぶさせた。

僕たちを取り巻く空間は沈黙に綺麗にパックされていて、その沈黙に耐えかね僕が焦燥を覚え出すまで、ゆるゆるとそれは維持されていた。

海馬のクエリーへ、『富部現実』といづキーワードを戯れに打鍵してみた。

今まで蓄積してきた映像やら会話やらがノイズに変換され、それはやがて寂寥感漂うシーク音へと還元される。

シーク音は悪戯に長い。

まあ富部に関する記憶があやふやなので致し方ないことだけれど、何分稀有にしてインパクトあるのが富部の姓だ。僕の海馬が例えぽんこつ仕様だったとしても、よもやレスポンスがないとは思えないが。

ずるずる。
ずるずる。

と。

対面する先生、夢野かのんの様子を窺いながら、僕は緑茶を音に乗せ轟下する。先生は恐竜の尻尾みたいな極太の三つ編みに頸を埋めて、件のしょんぼり文書を見下ろしていた。

マグカップのお茶はこれで三杯目だけれど、彼女からの応答は未だにない。さすがに焦燥を禁じ得ない僕なのだが、臨界に来ているのは尿意ではないのか？ と緩やかに蠕動する下腹部がそれを暗示唆しているような気がしないでもない。結局、どちらとも判断がつかない僕は、何かを急かすように小刻みに運動を繰り返している両脚を弛緩させるべく、こうして思い出に耽る心算に至ったのである。

しかし、こうして泥濘とした記憶に浮かんでいると、僕の海馬が溜め込んでいる思い出は、その殆どがありすと揃姉に占められているのがわかる。何というか、蜂蜜に漬かっている檸檬にでもなった気分だ。ただ甘なのに抜け出せない、そんな酸っぱい僕の生き恥。

皮膚の体温が上昇するのを察知したので、海馬のレスポンスの遅

さに業を煮やした僕は、大人しく自ら過去へ遡行することに決めた。しばらくすると、ようやく海馬から『もしかして：ベリアル』と、まるでフライパンの底を眺めているみたいな、どす黒な暗黒情報が送信された。いや待て。僕には悪魔の知人はいないぞ。悪魔な友達は少なからずいるけどな。そう益体もない突つ込みとフォーローを交え、海馬からの送信を拒否。引き続き泥濘の深淵へと意識を埋没させる。

砂嵐がふんだんに塗された映像と音声が色彩を失った鱗へと変じ、時系列を無視した連結する集合体となつて意識に纏わりつく。意外なくらいの情報量の多さに辟易としながらも、僕は懇切丁寧にその一枚一枚を剥ぎ取つていく。

その中に、宮部現実の面影があつた。

僕はその一枚を注視する。

首にヘッドフォンをぶら下げた田つきの鋭い女の子。

間違いない　彼女が宮部だ。

そう僕は確信し。

まるでありますがつけ爪を装着するみたいな気軽さで、僕は当たり前に宮部が描かれている鱗をジャックする。

脳と視界が淡い白色に包まる。

瞬間、白が黒へと反転。

それから、全身が嘘みた気に粟立ち。

そして、全身が感電したみたいに震えた。

暗闇が不気味に明滅する様は、僕が思い出に耽るのを明らかに拒絶している。

ここにようやく、海馬からのレスポンス。

呼吸をするみたいに、嘘をつく

それが彼女を証明する個性らしい。

思わず軽く舌打ち。

だけど、それがぽんこつな海馬に対するものなのか、宮部自身に

対するもののかは、良くわからない。

「これは僕が担当の先生に提出しておこう」
気がつくと夢野先生が僕を見据えていた。ようやく返ってきた先生の思つてもみないリプライに、僕はうつかり人間へと還ってしまった。
先生は既にことを終えて、マグカップ片手にすっかり優雅に窓を開いた。

温くなつたお茶に手を伸ばしている、僕の一の腕が視界に入った。田蓋の裏にはさつきまで流れていたテロップが淡い残滓となつて蓄積されていて、センサーみたいな周到さで斑模様を二の腕へと投射している。まるで皮膚の上で苺をすり潰したみたいな赤色が散見している様は甚だ滑稽ではあつたけれど、でもファンシーと揶揄するにはおこがましいくらいの様相をその赤い斑模様は不気味に演出していた。

僕が、過去の邂逅との接続に失敗したのは明らかだつた。

しかし、そのことに疑問の余地を挟む暇は、対面する夢野かのかの言葉によつ如才なく塗りつぶされてしまう。零とも壱ともつかない富部現実の果敢ない記号は、僕の無味乾燥且つ凡庸な返答によつて空氣へと昇華され、皮膚との同化を拒絶していた夥しいまでの苺の種も、マグカップで数回唇を湿らせただけで跡形もなく消え失せてしまつた。

手のひらから伝播する拒否反応を舌で転がしたあと、咽の奥へ流逝込む。

これで綺麗さつぱり富部現実を棚上げにした心算だつたけれど、粗儀した携帯食料みたいな氣の利かない言葉は只今咽頭にひりついて舌咽神経を絶贊逆撫で中です。

「どうした？ 浮かない顔をしているな」

「あはっ！ 泳えないだけですよ」

何？ このデジヤブと半ば憧憬に似た感情を抱きながら、僕はあります式笑つて誤魔化す作法を実践しその場を取り繕う。その他にも『ぐへつ！』とか『あへつ！』とか、あの幼なじみが持つている隠し玉は枚挙に暇はないけれど、ここはあえて地味な作法で相手を接待することにする。我ながら最適な選択である といふか僕の頭がまったく最適化されていない。

やれやれと、僕は頭を搔き箒つて反転反転されたしょんぼり文書を手に取る。それから口元に拳を当てて慄懾に咳払い。咽頭から迫り上がる言葉を舌で絡め取つた。宮部の唯一の個性に毒されないよう密かに念じつつ瞬きを数回。視界を現実に定着させる。もちろん、固有名詞じゃない『りある』なやつだ。

「安心して良い。少年が抱えているのはまったくの杞憂だ」寂寥せきりょうとしている空間に、先に水を差したのは先生だった。「担当の先生には既に話は通してある。例えどんな形式であれ、桜庭の意思は無駄にはならないよ」

「えっと」

先生の言葉を理解するのに、決して少なくない時間が必要だつた。僕が浮かない顔をしていたが故の先手を打つた应えであるということを、四杯目のお茶を淹れる道中でようやく僕は理解するに至つた。先生が激しく勘違いしている感は否めないけれど、まあ良いや。お茶請けにしては破格なサプライズには変わりがない。桜庭に持つて帰るお土産としても万々歳だ。

「さあか納得しかねるけれど。

「ようするに、これは確定事項だつたわけですか？」

「肯定しよう」

「僕が、村人に酷使される勇者であると？」

「いや、それはわからないが」

アンニコイな僕の言い回しに眉を顰めたあと、先生はしょんぼりじやなくなつた文書を引き寄せた。そしてそれを四つ折にし、白衣のポケットへと刺し入れる。うーん、致命的にカタルシスが不足している。どうせなら、肌蹴たシャツの谷間に押し込んだりぎゅうぎゅうしたりするくらいの気概は欲しいものだ。いや、決して『冗談だと言えないのが、何というか、心苦しい。とりあえすご不淨を拝借したい次第である。あ、これは冗談だけれど。

「それを見て、先生はどう思いました？」

僕は視線だけを白衣のポケットへ移動し、先生に感想を求めた。

正直、結果は既に出ているわけで、僕がこの場に留まる理由はないのだけれど。しかし、ソファに沈んでいる臀部はそうは思っていないらしい。まったく未練がましいくらいに正直な奴だ。そう僕は心の中で苦笑し、彼女から発せられる言葉を大人しく待つ。

「先行きが不透明な感は否めない。だが、桜庭が重い腰をようやく上げたのは評価に値する」

「そうですか」

なある、と僕は首肯する。共犯者じみた感想は期待通り。なるほど僕の慧眼はやはり的外れではないみたいだ。いや、慧眼を酷使するほど立派なものではないのだが。でも、白衣のポケットで悶えているあればともかく、桜庭自身の評価を耳にしたのは思わぬ収穫だった。

それに加えて

ぼぐ、いこーる、しょうねん。

さくらば、いこーる、さくらば。

で ほおう、である。

僕と先生が所見であるとこことを考慮しても、いやはや待遇の差は明確ですな。自ずと先生が桜庭を故意にしているのが、容易に想像がつく。しかし桜庭、意外なところで意外な顔を見せるものだ。まったく興味がつきない不思議少女である。僕の腰が重いのも頷ける。彼女もまた煉獄に迷い込んだ仔羊だったのか。

「少年」と、声を掛けられたので、僕は顔を上げて先生を見る。彼女は目を細めて物憂げな瞳で僕を捉えて離さない。それはこの先の言葉を否定させない輝きを内に秘めていた。「猫を被つた道化になるのが君の望みか？」

「滑稽ですね……、それは「僕は苦笑を浮かべる。「僕だつて信頼^{じのい}は惜しいです。軽率でした余計な詮索をしたことは謝ります」

「桜庭の友達である少年だからこそ、踏み入れてはいけない領域がある。彼女に対する君の思いは尊いものだが、それは決して彼女のためになるとは限らないよ。今はそのパトスは心の中に仕舞つて

おくことだ。いざなは桜庭のほうから歩み寄ることがあるかもしない。まあそのときは彼女の相談に友達らしく気安く請け負ってくれ。だから、君のそのつ謝罪はありがたく拝聴しよう。桜庭に代わつて、この僕がね。君は友達思いの良い奴だな「

と、先生はそう締めたあと、初めて僕に相好を崩す。

羞恥心を煽るその表情に、僕は思わず視線を逸らせてしまう。

まあ　彼女の大人な笑顔が魅力すぎた意味合いもそこには含まれているけれど。

まったく、何もかもお見通しな上に、そこはかとなく余計な配慮までしてくれる。

これじゃあ、あの変態外科医を彼女にたゞろ重ねてしまつではないか。

いやはや、本当に

「やつぱり夢野さんは夢野さんなんですね」

そう僕がぼやいてしまつくらいに、夢野先生はびつひとつもなく夢野先生でなのであった。

「すけあぐりー、遅かつたな」

「莉鈴さんに同じ」

ゆるい音楽に混じつて、僕を苛む莉鈴と桜庭の声が重なる。

二人は僕に背中を向けたままだつた。炬燵の中に潜んでいる猫みたいに「」そと肩を蠹かせている莉鈴を桜庭は無表情に見下ろしていた。ようするに、僕なんか眼中にないという物腰を彼女達は提示してたというわけ。莉鈴の場合は携帯型ゲーム機にお熱なんだろうけれど、こと桜庭に至つては僕に課したミッションがやつつけ仕事だということを暗に示していることの表れだらう。

タッチペンをあくせくディスプレイに走らせている莉鈴を横目に、僕は嘆息しながら彼女の隣りに腰を下ろす。僕と莉鈴のニッチを埋めるように桜庭は納まつていて、ときどき短い声を上げながら莉鈴と一緒に遊戯を嗜んでいた。相変わらず顔に変化は見受けられないものの、愉しんでいる雰囲気はなんとなくわかる。

しばらくバンズとパーティの良好な関係を維持した。

やがて携帯型ゲーム機から流れていたゆるい音楽は電子の世界に閉じ込められ、外部から漏れる運動部の声が次第に鮮明になる。『お疲れつした!』、と野太い周波数。それに呼応するように桜庭は咽を鳴した。「それじゃ、帰ろうか」

「そうだな」首肯してから、莉鈴は僕を見て頬をほころばせる。「莉鈴は腹ペ「だ」

「僕のほうが腹ペ「だつ」の」僕は苦笑を浮かべた。「レシートしか財布に入つてないから、買い物はできません」

いつも腹にベコでも飼つてなさい。非常食に。

「何なら奢りますけど?」

「どうしたんですか? 桜庭さん、やけに慇懃ですけど」

「うーん」桜庭は、セルフレームの中央に人差し指を当て目を

細める。そして、首を傾げて僕を見下ろす。「労い？」

「いや、僕に訊くなよ」

「じゃあ、打ち上げ？」

「何の？」

「じゃあ底上げ」

「何を？」

「厭？」

桜庭は僕を見下ろしたまま、皿蓋をそつと伏せる。半ば虚を突かれた形の僕は、人間であることを忘れ桜庭の睫毛の長さを測るメジャーに変じる。しかし遺憾ながら睫毛の震えを計測するのは不可能だった。そういうえば桜庭に買い物に誘われるのはこれが初めてだな。ありすか水色さんに誘われるのがデフォルトだったし。もつとも水色さんと付き合い出してからは、ありすとのその交友は途絶えたけれど。

おつと駄目だ 甘酸っぱい思い出に埋没しそうになる。

「そういうえば桜庭。お前、ありすに変なこと吹き込んでないだろうな？」

「約束したから。私の提案に、君は応えてくれたでしょ?」

逆に聞き返された。

僕が無言でいると、桜庭は『いのちは大事に』、と静かに呟く。それから「余計なことは言つていない」と一言。

「明日が楽しみだわ」

「どういう意味だそれ?」突然な物言いに、思わずすつとんきょうな声を上げる僕。やつぱり何か仕込んでるよ桜庭。

「じゃあ帰りましょう莉鈴さん」

「そうだなー。莉鈴は肉が食べたい」

「バンズで挟んだパーティで良い?」

「というか僕、外連味がまされてるし」

「行かないの?」

「いや、そういうことじゃなくて」「僕はひとしきり嘆息したあ

と、椅子から腰を浮かせる。「ああ、もう。どうでも良いや。悪いが桜庭、僕は昼間から何も食べてないんだ。だから、そこんどこよろしく」

「じこじたま食べなさいな」

頬をほこりばせて桜庭は首肯した。

一瞬だけ血行が良く見えたのは、錯覚だよな?

駅前のマックからの帰り道、私服姿のありすと遭遇した。

ありすは僕のことに気づいていないらしく、自身の横幅よりも遙かに大きい紙袋を肩に掛け、自慢（もちろん主觀です。はい）のツインテールをぶんぶん躍動させていた。まるで機嫌が悪いモデルみたいな足取りで歩道を蹂躪している。アスファルトに負荷を強要しているのは明らかで、僕がいる位置からでもヒールに踏まれているアスファルトの悲痛な声が認識できるくらいだった。

ふと制服の奥から携帯電話が産声を上げる。パンツのポケットに腕を滑り込ませ携帯電話を取り出す。視線はありすを捕捉したまま。だけど、雑踏に溶け込んで姿を識別できなくなつた。小刻みに震える感触を弄びながらサブディスプレイを視認。そこには、恩田揃音そろねという文字列を形作るドットが集積していた。

「あー、私だ。悪いが、今日は遅くなりそうだ。夕飯は一人で勝手に食つてくれ。私の分は作らなくて良いぞ」携帯電話を耳に当てるト、滑舌の良い男前の声が鼓膜に響いた。僕の返答を待たずに揃姉は、「じゃあな」と通話を強制終了しようとする。

桜田門の諸君に属している揃姉のことなので、定時には帰れないという不確定要素は既知だ。それに揃姉の一方的な通話にも慣れておいる。だけど、そのことを鑑みるにしても、僕が良い子ちゃん（もちろん、主觀ですよー）でいるのも冷蔵庫と財布の中身がとても許してくれそうにない。

両者の寂寥感に駆られた僕は、下克上上等な気概で揃姉にパシリを命じる。有能な腹心に囲われた有能でない重臣は、こうして乱世に翻弄されていくわけなのです。戯言にして嘘だけど。

冷蔵庫と財布の現状を説明した上で、揃姉に買い物を依頼する。揃姉は舌打ちをしつつ渋々承諾してくれた。まあもつとも、こうなることに至つた起因は揃姉にあるわけで、僕がやんわりとお願ひす

るのは的が外れていると思うのだけど、そこは両親不在の恩田家を支える大黒柱でおつとこまえなお姉様。ありがたくストレスを拌聴しつつ、それを脳内で洗浄して感謝の意に変換する。こうして良妻賢母な人間が形成されていくのですな。すわ戯言で嘘であります。

「しかし崇、お前今日の夕飯はどうあるんだ？ 遅くても良いなら鮓でも持つて帰つて来るが？」

「いや、良じよ」マックでの暴食祭りを思い出し、思わず吐き気が咽頭に充填する。「さつき食べたばかりだし」

「そうか。じゃあ嫁の所で」駆走になるんだな

まったく聞いたやいねーし。

しかし、嫁ねえ。

「ん なんだお前。まだ嫁と喧嘩しているのか？」

「いや喧嘩してるわけじゃないよ。別に学校じや普通に喋るし」

「そうか？ それにしてはここ最近、家に寄らないけどな。まあこれは良い機会だ。やはり、今日は嫁の家で夕飯を食つんだな。そしてしつぽりと仲直りしろ」

「いや、だから喧嘩しちゃいないって」本当にマイペースなんだからこの人は。そう諦観しようとした矢先、揃姉の言葉に違和感を覚えた。「でも、揃姉。良い機会つて、どういうことなの？」

仲直りする良い機会 つてなわけじゃないだろ？ そもそもありますとは喧嘩はしていないし。ありますを溺愛する揃姉にしてみたら、僕とありますの現状に穿つた見方をするのはわからないわけでもないけれどね。「うーん、それ以前に別の意図が見え隠れしている気がするんだよな。

「何をやっている?」

揃姉からの応答を待つて居たとき、ふと後ろから声を掛けられた。
「え そりやあ電話だけど」そのままの体勢を維持し、声の主に
応えた。明らかに眼球が拒絶の意思表明をしている。「うう」とし
た違和感が僕を苛み始めて、水晶体はあらゆる現実から逃避するか
のよう仮想体験に傾倒しようと試みている。一瞬だけ目蓋の裏に
お花畠が投影されたのは、後ろを振り返った先の僕の末路だろうな。
重力に引っ張られるほろ苦い塩味に唇を濡らしつつ、人生終了の苦
悶を舌で転がす。はつはー。戯言と嘘の舌妙（誤字にあらず）なハ
ーモニーが口の中で踊っているぜ。「お前こそ、何やつてんの?
こんなところで」

「え そりやあ買い物に決まつてんじやん」

「あ、そう」

「そうなのよ」

なるほど と、幼馴染とのやり取りに僕は一人得心する。

パンズの代わりにパンケーキでパーティを挟んだような違和感。も
っぱら気まずさを通り越して異質な白々しささえ醸し出している。
まあ、ある意味斬新な空氣ではある。新鮮な空氣でないとこうが、
僕達一人の関係を表していて笑えるけれど。しかし、登下校と共に
しなくなつただけでこうも格差が生まれるものかね。

「誰かいるのか?」幼馴染と疎遠をテーマに分析をしていた最中、
揃姉の周波数が鼓膜へ届けられる。

「ありすだよ」一拍置いてから僕は応えた。

「嫁だと?」「杞憂だつたか、と呴いてから揃姉は短く息を漏らす。
「仲が良ければそれで良い。じゃあ、あとはお前がしつかり守つて
やるんだな。切るぞ」

合意の手すら入れる間隙すら『えず、まったく要領を得ないまま

揃姉は一方的に通話を終了させる。ディスプレイには眉根を寄せた僕の透過された顔^{かんぱせ}。嘆息をして、携帯電話を閉じパンツのポケットに仕舞う。

「誰からだつたの？」

「ん　揃姉」

「ふーん。で、何だつて？」

「お前を守つてやれつてさ　　意味がわかんないんだけど」

「あ、あああ、あたひを！？」舌をもつれさせた頗狂なありすの声に、思わず心の中で舌打ちをしてしまう。不条理な通話に面食らつて、うつかりありすさんのタブーに触れてしまつたらしい。「を、を、をまえが、あああたひを、まま守つてくれゆゆゆゆゆ！？」

「いや、わかんないけど」

落ち着けよとは口にできず。愚考にすら至らなかつた結果を言語に変換して、ありすにそのまま投げる僕。

「ぱえ？」しかし、既に錯乱フィルターを施しているありすさん。言葉のキヤツチボールさえできやしねえ。

錯乱しているありすは僕をサンンドバッグに見立てたようで、しきりに背中を殴打し始めた。僕が何を言つても上の空で、一心不乱に拳を叩きつけるありすさん。まさか男の背中が硬いからといって、頑丈な使用だと思つていらないだろうな？　威力が尋常じやないんですけど……。

このままでは背骨を粉碎されそうな勢いだったので、いい加減僕は後ろを振り返ろうと試みる。そして、振り返った刹那、顔面に良いものもらつちやつたわけだけど。しかし、それが一進数の脅威ではなかつたことが、せめてもの僕倖のかもしけない　男の子にだつてちゃんと柔らかい部位はあるんだぜ。眼球とか　頬に余分な質量を加えられた錯覚を覚えながら、とにかく僕はありすと距離を置くことに専念する。

だけど、思わずたらを踏んでしまつたのは、邂逅にすら似た放課後（で、あつてるよな？）での久々のありすとの対面。

幼馴染という要素を加味したところで、穿たれた溝は容易には埋まってくれない。

一体、誰が穿ったかは置いておくとして。

金属みたいな重々しい空気を精製しているのは、僕達一人であることには違いかつた。

「」「ごめん」頭を垂れることで、ありすは謝罪を垣間見せる。

トーストにバターを塗るみたいな気軽さで事故を肯定する僕。殊勝にも笑顔を取り繕つてもみた。だけど、如何せんこの笑顔にはグラスファイバーは混ざっていない。ちょっとしたショックで壊れそうのが不安の種だ。

でも、そんな種でもありすの安心は芽吹くわけで、彼女は少量のぎこちなさを体軀に停滞させつつ、咳払いを交えて平静に回帰する。それから、ありつたけの虚勢。

思わず苦笑を浮かばずにはいられない。

もちろん、好意的な意味でだけだ。

エレベータでの密室。

静かな稼動音と微かな息遣いだけが充填する箱の中で、僕とありますは大人しく密室にパックされている。

横目であります様子を盗み見る。箱に飾られたビスクドールみたいに鼻先をツンと澄まして、ありますは虚空を見上げていた。一見、不機嫌そうな物腰だが、そこは幼馴染冥利に尽くるといったところか。あります呼吸を拾い上げる皮膚のセンサーは、満場一致でオールグリーンの信号を脊椎へ送信している。

いい加減、お互に唇も解れてきた頃だらう。そう僕は判断して、会話のキヤツチボールを試みることにした。

「今日は、買い物にでも洒落込んでいたのか？」

「今日も、買い物にしゃれこなす。主にお財布が」「骨までしゃぶりつくしているし……。どんだけ買い込んでるんだよお前。洋服だろ？ それ」

「まあね」肩に掛けている紙袋を一警して、ありますは僕を上目遣いで見る。「乙女を高めるツールとしては、足りないくらいだけど？」乙女のクローゼットは四次元にでも繋がっているのか？

「で、崇は？」

「マックで暴食祭りやつてた」

「タ」飯の前なのに？

「昼食と夕食を兼ね備えた、ハイブリッドな食事だったのですよ」

僕の粋な応答に、ありますは鼻息で感想を漏らす。

路上での錯乱振りが嘘みたいなクールさだった。

リハビリとしては及第点だな。幼馴染の反応を素直に評価する。自宅であるマンションまでの帰途。終始僕達は無言を貫いていた。だけど、お互いに会話を切り出す機会を窺っていたのは明らかで、水槽に漂う魚を連想させるように口だけはぱくぱくと有酸素運動を

繰り返していたのである。まあ、ようするに僕達の関係はある日を境に錆びついたままだつたけれど、再生不能に至るまでは劣化していないということ。しかし、逆説的に捉えるならば、このままの状態を維持していくは酸化の進行は止まることはなく、いずれは腐り落ちてしまう危うい状態だつたといえるのかもしれない。

だから、こうして会話をすることが劣化を食い止める最適な方法だと、お互に無意識に認識してはいたのだと思う。わりと平静を装つて過ごしてみたけれど、やはり片割れがないと僕達は成立しない。つまり、半身を失うという過程を得て、ようやく僕とありますはその考えに行き着いたわけだ。そのことに気づくまで、それなりの時間を消耗することになつたけれど。

有体に言えば、僕とありますはバタフライナイフのグリップみたいなもので、幼馴染というデリケートな部分を一人で覆つっていたのかもしれない。

それが、ふとした切つ掛けで分解して。

デリケートな部分が露呈して。
デリケート
鋭利^{テリケート}であつたが故にそれは酸化して。
かくして、

恩田崇は夢枕ありすの恩田崇ではなく、
夢枕ありすは恩田崇の夢枕ありすではなくなつた。
よくもまあ、今までの日々を安穏と過ごしていしたものだ。
なるほど。

水色さんの存在が、実に大きなものだつたといつことが再認識で
きる。

「どうか、足痛いんですけど」

ありすの声に、眼球が現実の認識を開始する。

スライド式のドアが、馬鹿みたいに開閉を繰り返していた。その中央にはありますが履いていいるミコールが、黒い存在感を強調していた。

「いや、ボタン押したら？」

「煩いなあ！ とつとと表にでろうい！」巻き舌でキレられた。

半ば追い出される格好で、エレベータから通路へ這い出る僕。緩慢にドアが横にスライドする中、対面する幼馴染に向かって、どう言葉を紡ぐつかと考えあぐねる。答えが導き出される前に、エレベータは再び密室を作り出そうとする。持て余した思考を嘆息に変換して、僕は踵を返した。

揃姉の言葉が、瞼の裏でテロップを張り巡らしていた。

ふむ、たまには僕から誘つてみるか そう、ぼんやりと明日のプランを立てているとき、後方から歪な、そして泥濘とした音が漏ってきた。

歩みを止め、後ろを振り返る。

ドアの隙間から、黒髪に絡められた白い両手が這い出でていた。

抵抗を覚えたドアは、ゆっくりとスライドしスリットへ収まる。

「いや、だからボタン押したら？」

「つるつさい！」歯軋りを立てながら、ありすは僕を睨みつける。

「祟。お前、明日覚えてろよ」

「はあ」ありすのあまりの剣幕に思わず狼狽する僕。もちろん、口から出るのは相槌的な応答だけ。

「ああ、違う！ そんなんじゃなくつて！ もうつ！」顔の皮膚の体温を少しだけ上昇させて、ありすは大袈裟に頭を振る。しばらくシェイクしまくっているツインテールを呆気にとられて眺めていると、一匹の大蛇を連想させるそれはやがて大人しくなつた。すつかりホラーの様相を呈しているありすさん。唇に髪を数本絡めながら僕を真つ直ぐに見据えて、「とにかく、明日、首を洗つて、待つてろ、馬鹿！」まるで咽頭からオレンジの果汁を搾り出すかのような声調で一語一句言葉を噛み締める。

『明日、迎えに来るから』とまあこんなとこりか。希望的観測だけれど、恐らく誤差は生じていなはず。
ざわめくものを胸に仕舞つて、僕は無言で首肯することと幼馴染に応えた。

さて。

これで、恩田ハーレムに迎える面子が概ね揃つたわけだけど

「あー」

思考がひりだすモノローグに羞恥を覚えながら、僕はソファへと倒れ込んだ。

リビングの滞留した空気が、皮膚の温度を上昇させることで空調の確保を推奨していたけれど、泥濘とした思考は身体へと伝播していく現状維持で妥協することを訴えている。

そのまま怠惰に身を任せた。

抜けきらない疲労はソファへと沈殿して、癒しを与える家具はその効果と相乗して睡魔を誘う小道具へと変化していた。

咽頭から競り上がる欠伸を噛み殺す。

仰向けになつて天井をぼんやりと眺める。

「あー」思考を活性化させようと声を上げてみた。声は空氣へ昇華されずに、高度を下げ僕に降り注ぐ。声を上げたのが返つて逆効果だと評価してみる。しかし、まったく反省はしていない。「うー」江戸川・フルフル・莉鈴 望む望まないに閑わらす、僕達は再会した。赤い竜と獣の末路は、未だ見えていない。

桜庭灰霧 かいむ 秘密結社同好会（仮）の創設に僕は巻き込まれた。

彼女が、何をやろうとしているのか何を考えているのか、僕にはわからない。今後の動向に注目したい。

夢野かのん 桜庭と因果を結んでいた事実に驚いた。あと、あの変態外科医の関係者であるのはほぼ確定事項だろう。たゆんたゆんがゆんゆんとしていて、ぶちやけ好きになりそうだ。

富部現実 ひむ かつてのクラスメイトだという記憶はある。それ以外はまったくの謎。夢野先生のカルテで発見したのも何かの因果だろう。追々調べることにする。思い出せないのも気になるし……。

恩田揃音そろね

要領を得ない通話。でも、僕の隣にありすを据えようとする意思是は窺える。揃姉は僕にナイトの誓れを与えたらしい。

剣呑。剣呑。

夢枕ありす とりあえず、幼馴染を再開することを約束した。お互い色々なものを棚上げにしているのは明らか。それを全て清算した後に辿り着くのが破綻だとしても、きっと僕はそれを享受するだろう。

村上水色

「あー、うー」

天井へとだだ漏れる思考を遮断する。

投影された映像は急速に精彩を欠き、本来あるべき時間軸へと回帰していく。そして、泥濘とした思考は次第にクリアになつていくのだけど

田蓋の裏にひりついている水色さんは、今日も「機嫌。

立ち直ろうとしている思考を一気に疲弊させた。

「息災です」

田蓋をそつと閉じ、未練を贈呈している水色さんの虚像を暗闇に溶け込ませる。

機能が回復するまで、あと數十分。

それまで、じつと大人しくするしか僕にはやることがない。

虚脱状態にある身体を緩慢に反転させて、ソファに顔を埋める。できるだけ水分を身体から排出して、水色さんの成分を薄めないと。

おいそれと明日の行動基準も設定できないしね。

それでは皆さん、

僕は一時、降り注ぐ現実をまどろみに逃避させますので、どうか息災で。

感情複合バッドステータス1

夏休みになんかあった！

夏休みになんかあった！

夏休みになんかあった！

あいつを見かけたときに、あたしを抑止していた理性はぶつ飛んだ。

鏡に向かって、できるだけ優しく微笑んでみる　目の周りの隈が苛つく。

思い出せない思い出がエスプレッソに浮かぶ泡状の牛乳にみたいになつて、すっかりカプチーノ気分で気取つている　正直、いけ好かない。

とにかく、あいつに会つてカプチーノを搔き混ぜせりやわないと。

あいつを好きになるのが止まんないのをどうにかさせりやわないと。

どっちか早く決めちゃ わないと　脚はシンメトリーで黒と白がシンメトリーになつちゃつたままだし。

ところで、あいつ……。

白と黒　どっちが好みなの？

（鏡の前のあります）

携帯電話のアラームが起床を推奨していた。

鈍痛に苛まれる頭を抱え、上半身をベッドから引き剥がす。

キッチンに向かつたま、脚をフローリングに馴染ませる。

それからしばらくして部屋を後にする。スーパーの袋がリビングに置かれたままなのを思い出した。

リビングに入る。揃姉がソーツ姿のままソファにうつ伏していた。

テーブルに置いてある袋をそっと手に取りリビングを後にす。

廊下に出ると僕の部屋から音が鳴っていた　ああっ、忙しつたら！

足早に部屋へと戻り、電子音を空気に昇華させ続けている携帯電話のサブディスプレイを見る。

変態外科医からだつた。

感情複合バッジステータス2

「おひはこよー」

「おはよーひーぞこます」

「おや？ 今朝はやけに電導率が低い声だね？」

「何なんですかそれ？」

「声が良く通つていいことだよ。うん、つまり、田覚めが良いつてことを、歪曲に表現してみたわけ」

「せうこうつ夢野さんは、今日も三次元曲面みたいな滑らかな舌ですね」

僕のシニカルな言葉の応酬に、あつははーと夢野さんは快活に笑う。「それはそうと、彼女との久方ぶりの逢瀬はどうだったのかな？」

「彼女って」皮膚の温度が少しだけ上がったのがわかった。『彼女』と『逢瀬』を思わず関連づけしてしまうのは、ひとえに夢野さんの人格がなせる業である。まったく ハード的には申し分ないけれど、ソフト的に問題があるんだよなこの人は。「莉鈴のことですか？」

「もちろん、江戸川・フルーフル・莉鈴のことだよ」

「夢野さんが期待していることは何も起こっていないですよ」

「あ、そう。まあフラグを立てたからって、すぐにイベントが起きたわけじゃないからね。恩田君は、出でて頭にパンツを脱ぎ始める女の子は好みじゃないだろ？？」

「はいそこまで」

通話、強制終了ね。

携帯電話をベッドへ放り投げ、こめかみに指を当てる。変態外科医の番号を着信拒否にしようか否か逡巡しているとき、再び携帯電話が産声を上げた。

「ああ、『めん』『めん』悪びれる素振りも微塵もなく、謝罪を申し

入れる夢野先生。「座薬を入れようとして、うつかり媚薬を入れてしまつた感じだよね」

「どんだけクレイジーな医者ですか あなたは」

僕の蓮つ葉な物言いに、『淫乱だけどー』と自らの人格の破綻を夢野さんは証明してみせる。突つ込めば突つ込むほど無軌道を貫くのはわかっているので、「あ、そうですか」と感慨もなく返答をする。

さて、どうやつて合理的に通話を終了させようか 変態外科医に対するアプローチの方法を模索していたとき、

「あ、そうだ。夢野さんに聞きたいことがあつたんですよ」

声帯はオートマティックに雄弁を振るつていた。いやまったく、カスタマーセンターにクレームを入れる必要があるようですね。身上に覚えのない自分の仕様に頭を捻つたあと、左手に携えているスープーの袋を眇め見る。生鮮類の末路が新鮮ではなく死肉にならうことを厳かに感じるばかりだ。

「僕の通つている学校に夢野さんの関係者とかいたりします?」

「君の学校にかい?」夢野さんはそう僕に訊き返してから、無言の電波をしばらく送信した。「ああ、恩田君。君つてもしかしてエーテンの生徒なのかい?」

訊き返す夢野さんの質疑に僕は、おや、と首を捻つた。

「あれ? 僕言つていませんでしたつけ?」

「そうだね」僕の疑問に肯定で応える夢野さん。「君にプライベートなことを話す余裕はなかつた。と、あのときの恩田君の雰囲気を鑑みて、私はそう評価するけど

ああ、そうだった。そんな余裕とてなかつたもんな。

夢野さんの的確な分析に、思わず納得してしまつ。

自分のことでいっぱいいっぱいになつていていた夏休みの日々が、脳裏に再生し始める。

やや駄目駄目!

ようやくメカニズムが維持できたのに、またぞろカウンターバラ

ンスで憂鬱になつてしまつんだぜ？

とつとと自分を取り戻さないと……。

「まあ、とにかく。僕は東之園高等学校、つまりエデンの生徒なわけで、そこで夢野さんの関係者と思しき人物とばったり遭遇しちゃつたわけですよ」

「そう……」僕の冗長な解説口調に反して、夢野さんの反応はシンプルだった。「あの子は元気だったかい?」

疎遠を垣間見せる質疑に僕が応えあぐねていると、夢野さんは朗らかに笑い声を上げて停滞した空気を弛緩させる。

「私の妹だよ」

「妹ですか」

「チュパカブラちゃんと言つてね……、まあ良くできた自慢の妹さ」「未確認生物を妹に持てば、そりやあ自慢にもなりますけどね」まあ夢野先生の上半身はある意味稀有な存在ではあるけれど 脳裏にひりついた、たゆんたゆんがゆんゆんしている電波を頭を振つて乖離させる。「初見で評価するのもなんですけど、まあ元気そうではありましたね」

「そいつは重畠だね。ところで恩田君、あの子と出合つたてことは、君は懊惱でも抱えていたのかい?」

それは、懊惱抱えまくりですけれどね……。

「いや、ちょっとした経緯^{じきゆ}があつて因果を結ぶ関係になつただけですよ」事実を背景になんとなく嘯いてみる。「他人に内臓をひけらかす氣概を持つほど、大した悩みはありませんから」

「まあ狂つた人間が、自分が狂つているとは認識してないからね。往々にして、狂人は自分が正氣であると常々錯覚しているものだよ。つまり主観的にアプローチするのではなく、客観的にアプローチされるのがここで必要になつてくるわけだ」

「まあ慧眼ですこと」揶揄するように僕は言った。しかし僕の懊惱は狂人の心理と同義扱いですか……、少なくとも自覚はしてゐんですけどねえ。

「そう照れるなよ。健全な青少年であるところの、恩田崇君」くすりと、夢野さんは笑い声を漏らす。「経緯はどうあれ、チュパカブ

「ちやんと因果を結んだのは、恩田君にとつてはプラスの補正に傾くとは思つよ。あの子、堅物そつに見えて実は色恋沙汰には手馴れていてね。気が向いたら相談してみて。」

「「」高説痛みりますにやー」おびけてお茶を濁そつと試みる。

「お褒めに預かり恐悦至極で「」ますにやん」と、夢野さんは僕の心理を汲んで乗ってきた。いや、本当、夢野さんの性能にはまといちやうであります。

「そういうことで、こひかが変わり者だと睨ひかれども、今後ともチユパカブラちやんをどーぞよろしく」

未確認生物に祭り上げらるまの親族に憐憫の情を抱きつつ、携帯電話の向こう側の姉君に了承の意を示す伝播を送信した。

「あー、お姉さん、少しだけ真面目なお話しありやつたからエロい気分なつちやつたな。ちょうど話題にも上がつたことだし、チユパカブラちやんのオッパイについて考察しようよー」

「どんだけ無軌道なんですか、あなたは……」

「H口のベクトルは常に変化してこりますよ」こひかはねー、と年甲斐もなくきやわいを前面に押し出した笑い声を送信する夢野さん。その奇声にさわやかな電子音が混入する。「おつと、アラートが私を呼んでいるぜ」

「そうですか。相変わらぬですね」と、社交辞令を含んだ切断の合図。

「じやあ恩田君。また電話するよ」

通信が切断されたことを鼓膜に認識させてから、僕は携帯電話を閉じる。

「さか変わり者だけどねえ。

携帯電話を手の中で転がしながら、夢野先生のおひぱい、いや違う、性癖について考察してみた。

フロイト先生にでも聞いてみなきやわかんねーや。思考が江戸っ子ふうにそんな答えを導き出した。まあ妥当なところだろつ。

持て余したエネルギーを、携帯電話のサイドキーを押す作業に割

り当てる。ふむ、良い時間になつてゐるではないか。
今日も、弁当なしの方向で

感情複合バッドステータス4

フライパン片手に炎と対峙する。

筋肉を弛緩させるほど手馴れではないし、逆に緊張させるほど経験は浅くもない。つまり、可もなく不可もなくの通信簿の三昧みたいな技能ではあるけれど、『気を抜くと目玉焼きがさに一さいどあつぶあつぶになるのは予想できるので、こうして僕は大人しく月見に興じているのである。もちろん、他の食材は既に救済措置を施してある。痛んではないかと心配だつたけれど、きっとそれは杞憂かもしれない。だつて、リビングの空調がぎんぎんに効いていたし。

「あー、温まつた」シャワーを終えた揃姉が入室する。もちろん、背中を向けてるので姿は視認できない。「くそう油断した。お前を注意した私があの様とは……、本末転倒だな」

「まあ お仕事お疲れ様です、つて僕にはそれしか言えないけれど」揃姉に殴られた後頭部が痛覚の妄想を訴える。「コーヒーは？」

「頼む。生でな」

「は？」

「いや、悪い」いつもよりは一倍増しの低い声で、『まだ寝ぼけているな……、しかも酒も抜けていない、最悪だ』と、揃姉は呟いた。僕は肩を竦めてから、目玉焼きをフライパンから皿に移動させる。食材のほとんどが肉類だったのが妙に納得できる台詞だった。桜田門の諸君であるところの揃姉が、よもや飲酒運転なんぞしていないだろうな？ と、訝しんでみたけれど、それは皆無と判断して間違いないだろう というか絶無だ揃姉の場合。生まれながらにジャステイク仕様だし 余計な詮索をしたことを反省。美味しいコーヒーを淹れることに専念する。

僕に入れ替わりに揃姉がぺたぺたとフローリングに足音を残して、一人分の目玉焼きを押収する。

『鑑識に連絡を！』などと、そんなリアルな冗談を揃姉が言つ」と

はなく、目玉焼きを一警したあと、踵を返して黙つてテーブルの席へと戻つた。ちなみに、ワイシャツ一枚でした。うほっ！ コーヒーの隠し味は酸化した体液に決まりですね、奥さんジョークだらあ。

「崇、バターを取ってくれ

揃姉に促されるまま、チヨコバーみたいに硬化している食用油脂に腕を伸ばす。アルミホイルから覗いている黄色味を帯びた固体を一瞥して、それから逡巡。

「僕が塗つてあげようか？」半ば常套句になつていてる提案を轉つてみた。

「馬鹿を言つたな、それくらい私でもできる「僕を睨んだあと、揃姉は任意同行をバターに求める。しかし、のつけから黙秘権を行使していたので、あえなく強制連行と相成つた。「まったく、私を何だと思っているんだ」

揃姉の不機嫌な言葉も場合によつては、こうも意味合いが異なるのか　自身の妄想に感心しながら、揃姉の一拳一動を大人しく見守る。舌を鳴らして、僕から目線を外す揃姉。どうやら僕の生暖かい視線に気づいたらしい。込み上げてくる笑いを殺すため、奥歯を噛み締めた。

息を殺した揃姉は、眼前の牛酪にバターナイフを刺し入れる。小刻みに揺れるナイフの振動が、緊張しているのがあけすけで滑稽なくらいだ。しかし、敢えて言及はしない。

バターナイフはその存在意義を全うするためスライドを開始する。滑らかとは評価しがたい、ぎこちないくらいの機械的な動作。

「あ　」ややあつて、揃姉の小さな喘ぎ声。

その声に呼応するかのように動きは加速度を増し、そして勢い余つて空気を引き裂いた。

眉根を寄せ、バターが剥離したステンレスの先端を揃姉はじつと見つめる。

で、件のバターはといつと　見事な放物線を描きながら滑空していた。

揃姉の今の機嫌と同じくらいの角度で視界に入る軌跡を、しみじみと見守る。それから程なくして、重力に打ちひしがれた鈍い効果音。死角になつていて視認はできなかつたけれど、フローリングが不要な栄養摂取をしたことはまず間違いない。

恩田揃音そろねが不器用を露呈した瞬間である。

我が姉ながら、完成度が高い故に……、萌えますな。

さて、揃姉が意地を反復する前に行動しましようかね。

僕は椅子から腰を浮かせて、揃姉に拘束されているバターとナイフに手を伸ばした。明らかに指が抵抗の意思を示していたが、フローリングの清掃係を僕が命じると、渋々と揃姉はその抵抗を和らげた。

揃姉が席を外している間に、トーストに薄化粧を施した。ちなみに、この何てことのない一連の動作も、揃姉は壊滅的に下手くそだつたりする。根本的に道具を使うのが苦手な人なのだ。携帯電話も通話以外の機能はまったく使えないし、車の免許を所持しているのが奇跡以外に表現する術がない。揃姉の後輩にあたる入間さんいりまが語るまことしやかな語りでは、被疑者に手錠を掛けきれなかつた挙句、同情した被疑者自らが手錠を掛けたという話もある。まあ直接見たわけではないし、眉唾な感は否めないけれど、否定できないのが微妙なところだ。

でも、化粧をこなせるのが不思議なんだよなあ。

自身を高めるアイテムは、身体の一部だと認識でもしているのかね 思考にそんなしこりを膿みながら、一枚目のトーストに化粧を施す。

しこりといえば、気になることがもう一つ。

「揃姉、昨日の」

「電話だ」言葉の続きを紡こねうとしたら、揃姉の周波数がそれに追随した。「まったく、かしましい。お前の鼓膜は搖らいでいいのか?」

気がつくとパンツのポケットの中で携帯電話が太ももをくすぐつ

ていて、ぐぐもつた電子音が空気を震わせていた。

「あ、先輩。事件のこと私なりに考察してみたんですよ。聞いて

もらえます?」

人間依流さんからの電話だった。

感情複合バッドステータス6

まるで拾われた仔犬みたいな底抜けに明るい声調に、思わず手のひらから携帯電話が零れそうになつた。

携帯電話を持ち直して鼓膜へと漸近させよつとしたが、その必要はなさそうだ。といふか寧ろ、近づけたら聴覚障害を引き起こしそうな危うい声量である。顎を引きつつ、携帯電話をテープルの上に載せる。その間も入間さんの『事件の考察』とやらは続いていた。だけど、如何せん戦闘機ばりの音速トークだったので、話の内容を把握するどころか単語を抽出することすら困難だ。せめて、レシプロ機並みに緩やかに飛んでほしい。

「 で、以上なんですか？」、つて先輩、聞いてます？」
「 今、ブラジル辺りだと思いますので、もうしばらくお待ちください」置いてけぼりな現状をシニカルに表現してみた。

「 はあ、ブラジルですか？ まあ良いですけど。それで、先輩どう思います？」 皮肉通じないし……。自我を貫き通す天然ものの個性に僕が手をこまねいているとき、入間さんは「おや？」と頓狂な声を上げる。「何か声、凛々しくないですか？」先輩。それ、もしかしたらイメチェンだつたりします？」

イメチョンだつたりするどころか、キャラもジョブもチョンジしてます

といふか、気づけよ。

「 いや、入間さん。脈絡のないお話の途中で申し訳ないのですが……」

「 、僕ですよ」

「 はあ」と相槌的な返事をする入間さんに一泊置いてから、「いつも姉がお世話になつています」と、僕は言葉を上書きする。

「 およ？」もしかしたら先輩の弟さんですか？」よつやく、電波の終着駅が揃姉ではないことに気づく入間さん。「ああ、分かりました。先輩、まだ寝ているんでしょ？」

「いや、起きてますよ。今、床をワックス掛けします」

四つんばいでフローリングと格闘している揃姉を一瞥してから、携帯電話に視線を戻す。と、入間さん。軽く推理を否定したのに、「なるほどっ！ 忙しいから代わりに出てあげたんですね？」しかし、朝から先輩をこき使つとは継母冥利につきますなー」など僕の言葉をハラフた拳句、新たな推理を披露してその上メルヘンを脚色する始末。

「じゃあ私が魔女役ですねー。履かせる靴は鉄下駄で決まりですね！ 馬車の代わりは先輩のシトロエンで構いませんかー？」

それで興に乗ったのか、入間さんは勝手にシナリオを進行させてきた。茨のマイウェイだそりやあ。

いやまあ、揃姉が傍にいないことを前提で話していると思うんだけど しかし鋼鉄の姉君は、フローリングの上で青い炎を蕭々と滾らせ中なんですけどね……。

「ああ 悪いがシンデレラ役は入間に譲るよ。シトロエンは元々私の物だからな。鉄下駄をもつて迎えに来てやる……、待つてろ」

「あれ？ 先輩、いたんですか？」悶死しそうな僕の心中に反して、入間さんは縛々な電波をゆんゆん送信する。「しかし先輩、今日はやけに乗りが良いですねー？ 化粧の乗りは大丈夫ですかー？」

「お前に履かせる鉄下駄、じっくり温めてやんよ」嘆息を混合させた二酸化炭素を吐き出す揃姉。

「いやんっ。足の裏だけ 本能寺の変 みたいな！ そんな先輩は亭主関白みたいな！」

誰が上手いことを言えとつ

「お前、あとで手打ちな」

「寧ろ手籠めにされてーっす」

語尾にはあとマークどころか、ついでに鳩までぶら下げていそう。なおめでたい声調で、揃姉にアウトローな欲求を吐露する入間さん。そんな入間さんを、半ばフローリングに寄生している形の揃姉は、短く鼻息を漏らすことの一蹴する。

氣まずさの予兆を一切殺した寸陰すんいんが僕に纏わりついて、牛乳を嚥下する旨を推奨していた。

大人しくその空氣に従う。

火照った皮膚が、緩慢に正常で上書きされる。

一度身震いしたあと、コップをテーブルへ戻した。

「崇、どうした？ 風色が優れないようだが」 摂姉が訊ねる。

「気のせいじゃない？」 そう嘯いてから、僕は一度首を竦めた。目を細めながら摂姉はひとしきり僕を観察して、それから作業を再開する。「それで、入間。用件は済んだのか？」

「あ、はいはいそうでした。先輩、聞いていたんですね？ それで、私の考察どう思います？」

「出勤してから話す。あと入間……、不可抗力とは言え、民間人には饒舌なのは感心しない」

「う……、じめんなさい」

摂姉は僕を一瞥したあと首を捻つた。どうやら音量を抑えた入間さんの声を聞き取れなかつた様子なので、謝罪している旨をそのまま伝えた。

「じゃあ弟さん。私はこれでお暇しますが、さつき話したこと、頭のPCII箱にドロップアウトしてくださいね」

「いや、保存すらできていないので」

「冒頭に限つてのことだけどな。そこから先のことは、額から吹き

出る汗が証明している。もちろんそれが、牛乳の冷却作用を凌駕しているのは明白ですな。心臓がカミングアウトしろって、今でも鐘を体内に響かせてるし。」こういった揃姉と入間さんのやり取りは機知だが、だけ知つているからといって別に耐性がつくわけでもないのだ。

揃姉は存外にしてその耐性はついているみたいだけれど。
まあ腐れ縁という因果を踏襲すれば、僕とありすも似たようなものか。あいつも結構、辛辣にものを喋るときがあるからな。

「あつと、切る前に訊きたいことがあるんですけど、良いですか？」

「はい、何でしちゃう？」

「不可抗力とかなんとかって先輩が言つてましたけど、もしかしたら私が掛けた電話って、弟さんのだつたりします？」

「入間。お前は興奮すると視野狭窄に陥りやすいからな。大方酩酊した勢いで、登録されている名前を識別できなかつたんだろ」僕の代わりに揃姉が応えた。

「え？ 私酔つてませんけれど……」

「アイデアが浮かんだ状態は、酔つているのと近似してるんだよ」「はあ そういうもんですかね。まあ良いんですけど。それじゃあ

分かりやすくてちらかの登録を更新しておきますね」

「それではお一方、息災でー」と快活に入間さんは言つて、通話を切斷する。

「まったく、かしましい」嘆息をしてから、揃姉はそうフローリングに囁き掛ける。そして、おもむろに顔をこちらに向けて、「そういえば、今日も嫁は来ないのか？」と僕に問い合わせた。

「我が姉ながら、上目遣いがコケティッシュで、萌えますな。

ふむ 入間さんが呼び水となりましたか。」「ああ、多分 今

日から来ると思うよ」

感情複合バッジステータス8

「随分と、希望的観測な物言いだな」上目遣いで僕を見つめたまま、
揃姉は言った。

僕は肩を竦めることで揃姉に応えた。とりあえず上手く笑えたとは思う。

しばらく、揃姉は僕への視線の投射を維持していたけれど、短い息を漏らしたあと、口の端を僅かに持ち上げその視線をフローリングに移行させた。

揃姉の目的は、言葉を投げ掛けることにより、僕の反応を促し、表情の変化を読み取る。その結果として、僕の言葉の信頼度を高めることに主眼があった。奇しくも僕の反応は概ね良好。まあその結果に至る起因は明確なわけで、不思議でもなんでもないんだが現在僕は思春期というホルムアルデヒドに片足どころか全身浸っちゃっているわけです。心中はお察し下さい。とにかく、揃姉は僕の反応にご満悦の様子。さっきからちらちらと廊下のほうを振り向いている。まつたく、見ているこっちがそわそわしちゃうぜ。この寂しがり屋さんめ。

というわけで僕が揃姉を観察していたとき、インターフォンが鳴つた。

「僕が出るよ」立ち上がるうとした揃姉を制して、ホスト役を請け負う。

廊下へ出る間際に、室内に設置されている時計で時刻を確認。来訪用の体内時計でも特注していそうな正確さだ。つまり、奴が来るにはうつてつけの時間。それに、インターフォンを連打する感覺も錆びついてはいないみたいで、いつもみたいにふつふつと苛立ちが込み上げてくるんですけど、まあ良いか。

廊下へ出て玄関子機を手に取る。

「いらっしゃるスネーク、飯はまだか?」

「いや普通に現地調達だろ」

僕の返事を最後に文書は途絶えた。ステルスなゲストを迎える気概は僕にはないぜ。

しかし、どうにもあいつ蛇に絡まれたり絡んだりする性質らしい。無意識下に蛇を飼っているのが起因しているのかねえ。

思考を這い回る、夏の回顧を堰き止める。

前頭葉でのたまう悪魔が顎を小さく引いて赤い舌をひけらかす。でしゃばるなよ 飼い主のここにでも引き籠つてみ。

「開けるよカス」現実を開始したころに、幼馴染の苛立ちを内包した声。というか、苛ついてるのがあけすけだ。なんでこいつこんなにムカついてんの？ あとでカルシウムとマグネシウムを贈呈しないと。

ドアチャーンを外し鍵の開錠をしてから、「入れよ」とセキュリティの無効化を幼馴染に親告すると、それから間を待たずにしてドアが勢い良く開かれた。

肩で息をする幼馴染と視線がかち合つ。

久方ぶりの、朝っぱらからの対峙。

いつもと違うのは、こいつが多少色気づいたことか。

すっぴんがデフォルトなはずだったのにねえ

僕の下世話な視線に気づいたのか、ありすは瞳孔を収束させ僕を睨みつけ、

「べ、別にあんたのためじゃないし」と、シンデレ要素を加味した意味不明な言葉を解き放つ。

「あ、そう「某犀川先生ばかりに僕もシンデレしてみた。

「あ、そうつてお前……」不機嫌を頬張つた膨れつ面な顔が、僕の鼻先まで漸近する。「身だしなみに手間と時間を掛けた結果が、それか?」

「うひゅふひい! ふひゅふひいです! まじふえ!」

王妃にガン視されながら頬をこねくり回されている僕は、迂闊にも心無い贊美の祝詞を諳んじてしまう。僕が魔法の鏡だつたら、白雪姫に降りかかる惨劇を未然に防げたかも知れないねえ。

「ブラフだろ? それ

「いひや、はつひやりにやんてめつひょうもない。ぼひゅがちひんなだけでひゅびょ」うむ、また迂闊にも嘘が露呈するような否定をしてしまった。姫様の安否よりも、まずは自分の身の安全を確保したい所存であります。もう無理だけど。

瓦解したドームに特攻を仕掛ける某大佐の如き氣概で覚悟を決めたものの、しかしもちろん、ありすの日からドーム兵器とか実弾兵器などがびびびと発射されるわけでもなく

「まあ良いや。気づいただけでも由とするか」存外にも、あつさりと武装解除してしまう。「あー、ねむねむ」

悶々と、中途半端に熱を帯びた頬を交互に撫で擦る。

どうやらありすん寝不足らしい。

「で、どんだけレベル上がったの?」出力不足の起因を探るべく、ありすにカマを掛けてみる。

「寧ろ、お前のレベルを上げたほうが良いんじゃない?」顎をしゃくり上げて、ありすは僕に鼻息を吹き掛けた。「デリカシーのステップをお勧めしたいけど?」

「あ、はい、まあがんばります」首を傾けて破顔するありすに気圧されて、思わず殊勝な返事をし、お香を吸引したり種を齧つたりしても能力が上昇しない現実を心の中で呪つた。

「上がるわよ」

と断りを入れてから、ありすは靴の踵に手を掛ける。その際、ちらちらと視線が僕のほうへ泳いでいたので、先にキッチンへ戻ることはせずに靴を脱ぐ作業を甲斐甲斐しく見守る。ときどき視線がかち合つ度に、瞳孔が何かを期待している色彩で反射しているのだけど、ありすは口を噤んだまま作業に勤しんでいたのでその真意は図りかねた。

「とりあえず、自分の好きな色で選んでみたんだけど」フローリングに片足を載せ、僕を見据えるありすさん。

何かしらの反応をありすが要求しているのは明らかだが、それって、パンツの色のことを言つてているのかい？ などと、もちろん某変態外科医よろしくおやかに訊き返すこともできず、「ああ、まあそうねー」と対象の不明瞭さを有耶無耶にする。

軽く舌打ちして、ありすは僕と肩を交差させる。「崇、あたし口一ヒーね」

「はいはい。だだ甘に淹れさせてもらいますよ」

「……、たまには素材を大切にしたい」

「豆でも齧るきかよお前……、知性でも欠けてるのか？」

「お前のゲーム脳に理性が欠けそうだ」

嫌味を交えた嘆息を空気に昇華させたあと、ありすは足音を立てながら不機嫌を廊下に染み込ませる。

幼馴染の言葉を頭の中で反芻するまでもなく。

そのセンテンスに謎を解く数値が隠遁としているわけでもなく。容易に二コアンスを汲み取ることができるので

「難しい年頃だしねえ」

「そうお互いに」。

大股で廊下を闊歩する幼馴染を追隨して、誤差が生じている日々

常に苦笑した。

先行していたありすが立ち止まる。

キッチンの敷居を跨がずに反転し、僕へ手招きをして距離を詰めるように促した。

幼馴染の意図の読めない行動にこわさか困惑しつつも、困惑が隠蔽された瞳に引き寄せられる。

漸近それから停滞。

口を開く暇も与えず、ありすは僕の背中へと回り込んだ。

薄っぺらなワイシャツを通してありすの体温が伝播する。

手のひらを媒介にして僕達は密着し、そして背中に張りついたそれは擬似的な脊髄へとその役割を与えられ、僕を前進させようと信号を送信する。

入り口へ辿りついて、信号は命令を変換した。

というか、痛いんですけど……。

痛みに苛まれて思わず後ろを振り返るが、皮膚に上書きされる鋭利な痛みが指示系統の喪失を再認識させ、目の前の情景を僕は空虚に視認を開始する。まるで地獄の監察官に繰られる死体みたいなアンニコイな気分で。

僕の視線の先。フローリングの上で脚線美を具現化したおみ足を、太ももから脚の裏まで惜しげもなく晒したご婦人が一人。何を隠そいや、一部分が明らかに隠れていないけれど、まあ良いかなにをいわんやあにはからんや、恩田揃音（おんたそろね）こと僕の姉である。ちなみに、括弧に区切られた数字は心のモザイクを掛けて戴くようお願いしたい。

思春期を未だ迎えていないお隣のいーくんもお二階のみーくんも、堪らず前傾姿勢になること請け合いの、そんなふしだらな情熱^{バトス}を開眼させそうな姿で四肢を蠢かせている様は、本人に自覚があるか否かは別としても、幾ら実弟の僕といえどその情景に扇情の念を覚え

ざるをえないわけで

僕の気配を察知した揃姉がおもむろに振り返り、

「ん もう少しで終わる」

囁き、

上目遣いを停滞させ、

体温を僅かに上昇させる。

非日常が日常を凌駕している事実に、思わず視線がフローリングを彷徨うのだった。

「僕の姉貴がこんなに可愛いわけがない」

「何を言っているんだ馬鹿者」

柔軟な表情が一転して、揃姉はいつもの凜々しいそれへと回帰する。

「いや、揃姉……、観察力、観察力」

メンタルな痛みに苛まれながら、背中に同化している幼馴染に視線を注ぐ。すわ妄言を吐き出したのはこの阿呆であり、間違つても僕ではないのだ。その妄言に概ね同意してしまった事実は、黒歴史として既に心の最奥さいおうに仕舞つているけどね。わはは。

まるでゾンビに齧られたみたいに頭の一部分だけしか視認できな
い。本人は上手く隠れているつもりだろうけれど、僕の肩甲骨から芽吹いている触手が隠遁の滑稽さを証明している。知性なき神性に使役される旧支配者に同調したい気分だ、まったく。

しかし、嘲笑はせずに視線を再び揃姉へ向ける。

胡乱に僕を眇め見ていた揃姉の瞳が、親愛の色彩を反射した。

「おおっ、来たか」

「久方ぶりだね、揃姉。というか声で気づけよ」

僕の裏側で、挨拶を交えたギミックの破綻をありすは自ら口にした。

「敢えてスルーしてたんだけどな」数歩下がつてありすと対面し、ツンとお澄ましさんしていいる黒色のアイデンティティーをそれぞれ驚掴みにする。「お前の突つ込みは、入間さん並に音速なのですか？」

「止める！ 力が抜けていくつ！」いや寧ろ漲つてんじゃねーか…。僕にツインテールを持ち上げられ、獵師に狩られたあの兎みたいな格好になつてているが、眼球の表面を覆つていてる攻撃性はまるつきり狼そのもの。額を苛むフィジカルな苦労^{クロ}がいてーいてー。「うぐぐう……、追撃よろし！」

ありすのさらなる抵抗に備え身構えようと身体を緊張させたとき、ふと空間に木霊する笑い声が弛緩を呈する。

「その意味のわからないやり取りも、久しづびりだ」「くすくすと指の隙間から声を漏らして、揃姉が可笑しそうに僕達を見上げていた。お気に入りの映画を鑑賞する子供のよくな^{まなこ}眼が、粘度を帶びて皮膚を這い回る。ありすの髪から両手を剥離させ。そして、抵抗と甘受を繰り交ぜにして膿みだされる拒否反応に、幼馴染の情報を摩り込み馴染ませる。

こいつも同じようなことをしていいるから、笑えてくる。

だから、まつたく問題なし。

しばらく、それを繰り返していれば僕とありすはいつも通り。きつと、細胞が僕達の関係を思い出してくれるはず。それまでしばらく」この関係で。

嘘も吐き続ければやがて本物になるつて言いますもんねえ。

「やはり、嫁がいないとどうにも違和感が拭え切れなくてなふむ。

我が姉ながら、ストレートに欲求不満を吐露する実直さも、また萌えますなー。

「よつー!? よよよよよ」

「ヨグ……、ソートス!」

ありすさんがどうやら時間連續体の外側から送信される暗黒電波で精神に異常をきたしたため、偽者であります、まかりなりにも魔術師でありますこの恩田崇めが、幼馴染に代わって外なる神に接觸を試みた次第でござります。たつはー。

頭頂部から湧き上がる目一杯の疑問符を可視化できるへりこ、不思議そうな顔を揃姉は揃えていた。

というか、まったく噛み合っていない僕達なのである。

いやはや、水色さん成分は一筋縄じやいかない模様ですな。

やれやれ と。水色さんではない村上さんふうに自嘲する」とで自分を戒める。

「どうやらこの子、寝不足でバステ氣味みたいねえ」
どん引きしている揃姉に愛想笑いを振りまいてから、ぽんこつしてこるありすの手を引きテーブルへと誘う。

感情複合バッジステータス12

ありすを牽引したあと、揃姉にも席へ座るように促し雑巾を頂戴する。意地を反復されたフローリングの末路は酷い様で、なんとうかハルマグドンしていた。雑巾もそこはかとなく默示録しているし。それに、死臭が漂っているように思うのは僕の錯覚だよな？

戦乙女さまが降りなすつたあ などと心の好々爺が戦慄を禁じえないご様子なので、フローリングに出現したメギドの丘を削り取つて、死臭をバターのそれへと還元する。一枚目の雑巾とかで拭く。ごりごり。

作業が終わつてテーブルを一瞥してみると、娘っ子達（いささか誇張表現あり）が談笑に興じていた。

寂寥感を覚えながらも、かしましい一人を微笑ましく眺めたりする。こういうノスタルジーに似た感慨をなんて表現するんだっけかあー……、殺意？

「ほさつとしてないで、コーヒーでも淹れなさいよ」
自己修復を終えた幼馴染の突つ慳貪な声に、シンティレボーイは業腹だ。お前に履かせる鉄下駄じつくり温めてやんよ。と、先代シンデレラ（揃姉リミックス）の呪詛が脳裏を霞めたけれど、世界で一番お姫様している奴にそんな虚勢を取つたりでもしたら、逆賊の謗うそしりは免れまい。下手をすると、火炙りどころかコロンビヤード砲で太陽まで射出されてしまいそうだ。よつて自重。憤怒の形相も苦笑するまでに止めておく。

揃姉にありすに対する呼称の更新を推奨するか、それもありす自身の耐性付与に期待するか 歩きながら裁定を懊惱していたとき、

「で、どうしてしばらくなかったんだ？」

ふと、揃姉のそんな詰問を、コーヒーメーカーの前で聞き取る。その瞬間。

どりり と。

「コーヒーメーカーの分解能が、カップにコールタールを精製させる。

内心に認識される妄想に戸惑いながらも、コールタールが形成する輪郭をじっと見つめる。

リヴィアたんの声は、ありすの声そのものなんだよ。

とぐろを巻いた蛇が、色彩の欠けた眼まなこをおもむろに僕へ向ける。

滑り気を帯びた湿気が皿蓋の裏にひりつく。

目を擦ると、コーヒーメーカーは本来あるべき機能を取り戻していた。

しかし、カップが許容範囲を上回るという代償を糧にして。

「うん、まあ……。その、色々とあるのよ……、思春期だし」

言葉から生成される微妙な間に、投射される視線が皮膚をひくつかせる。だけど、それは不快を有する視線ではなかつた。そんなことより、憂うべきは、視線に内在する、幼馴染が抑圧していた、僕に対する特別な価値観。

「そうか、まあ良い。お前が話したくなれば、私は無理に訊かんよ。またこうして顔を見せてくれたしな」

「ありがとう、揃姉。まあ今後ともよろしくつてことで。それで崇、お前コーヒーは？」

「お前のそのスタンスは変わることがないのな……」

感情複合バッジステータス1-3

相も変わらずお姫様お姫様な態度を取つてゐるありすに、堪らずそんな愚痴を溢した。

心中で舌を鳴らして、唇から顎へと横断してゐる迂闊な言葉を、慌てて手の甲で拭う。

「は？ あたしはいつだつて一軍じやん？」

「イケメンをラーメンのメニューだと勘違ひしてそつた英語力のなさだそりやあ」

僕の突つ込みに、ありすは「そんなことないもんっ」とのたまいで唇を窄める。

「どうか、こいつが阿呆で本当に良かつた。

いやそれも、記憶の一部を代償にした偽者がなせる業カルヤ故……、か。 そうじやなかつたら僕の言葉にボケを返すほど、ありすといつおにやのこは愚鈍ではないですかねえ。

「ねえ、『コーヒー』『コーヒー』『コーヒー』まだあ？」

「へいへい。只今、お持ちに馳せ参りますよ」 杞憂をポケットの最奥に仕舞い込んだやさぐれ執事は、パンツのポケットに右手を仕舞つたまま横着にも左手でカップを牽引するのでござえます。 「お待たせしました、おせうさま。ご所望のアメリカン、グラム・ギヨール仕立てでござります」

「まあ、コースターにだだ漏れてゐるコーヒー汁が、まるで血生ぐわさを演出してゐるようで素敵だわ」 ついつい、と膨れつ面でコーヒーを僕の元へスライドさせるありすさん。 高評価のわりには僕の淹れたコーヒーはお気に召さなかつたよつて。まあ、僕に漸近する度に、縁から吐瀉を散見させてゐるのだから嫌悪するのは仕方のないことだけれど。 「淹れなおせ」

「んもうつわがまま 我儘さんなんだからつ」

「誰が我儘か。明らかに淹れすぎだろこれ……」

「へいへい。とびつきりのやつ拵えさせてもらいますよ」

表面張力が作用して憚らないコーヒー カップを黙つて受け取り、自分の席へと移動させて、それから再びコーヒーメーカーと対峙する。胸キュン（ストレス的な意味で）させる悪魔が再び鎌首を持ち上げないよう念じつつ。コーヒー カーの分解能を大人しく見守つた。

「素をあ、ここのジャムなんか鋸びついてる」

かんばせ

カップを唇に当たたま、顎を引いてありすの顔を眇め見る。口

にトーストを咥えて

いるありすは、半ば睨むようにしてガラス製の瓶を見下ろしていた。うつかりフォアグラのペースト（ダウト！）でも奮發したのかと胡乱に思い、ラベルに綴られている文字列を目線で追つたけれど、それはなんてことはない普通のミルクジャムだった。

いや、斬新な味覚を提供している時点でミルクジャムはその普遍性を喪失していることになる。しかし、これは僕ではなく、ありすの視点から観測した場合に限つての事象であり、やはり僕にとってみればミルクジャムは普通のミルクジャムでしかないのだ。よつて、幼馴染の尖つた指摘には外連味を感じざるを得ないわけで、その演出には「てやんでい！ おれっちのミルクジャムにケチつけようつてのかい？」と、江戸っ子ぱりに憤懣やるかたない気分すら覚えてしまつくらいである まあ奴の歌舞いた顔を見なければの話しなんだけど……。

なんだかんだ言いつつも、テーブルを見つめたままトーストをはぐはぐ皆既用食しているありすさん。だけど、消失しているトーストに反して、鼻から供給されている液体は止まることを知らなかつた。ついには、ぼたぼた赤い斑模様をテーブルクロスに描き始める始末。

「あれ？ 鼻から苺ジャム出でるよ」舌で上唇を端から端までなぞつたあと、ありすはぼんやり天井を見上げる。「ミルクジャムに苺ジャムを混ぜると、鉄の味になるんだね……、知らなかつた」

サンジェルマン伯爵も思わず大絶賛の鍊金術ね。などど桜庭好みの突つ込みはおいておいて。

「いや、それはなぢだから」空想科学実験している幼馴染を嗜め、

僕は椅子から腰を浮かせる。「そのままじつとしている。今ティッシュ取つてくるから」

「うー」

「病院とか行かないで大丈夫なのか?」僕とありすを交互に見ながら、揃姉は絶え間ない瞬きを繰り返す。「救急車呼ぼうか?」

肩を竦めて、首を横に振つた。

遺憾ながら、揃姉の期待に応えられそうな病院はどこにも該当しそうにない。かるうじての候補の一つとして動物病院が上がつたけれど、鯉の病氣はその治療対称に該当するのかは、浅学な僕には図りかねる。

といふか魚類違うから。

いざれにしろ、揃姉の提案は徒労に終わることは自明だ。「ま、ティッシュ突っ込んだけばその内止まるでしょ」

つと語尾を殊更強調し、その勢いに乗じて程好く丸まつたティッシュをありすの鼻穴に突つ込んだ。せ、積年の恨みを発散させただけだからね! ベ、別に照れ隠しなんかじゃないし。などど、内心でツンしてみたけれどまったく萌えない。やれやれ、当然だけど。

「ふまつ!?

感情複合バッドステータス15

奇怪な喘ぎ声を上げて、ありすは目を大きく見開いたあと、睫毛を数回瞬かせる。

僕のツンツンふりに不満を覚えたらしい、「このお人形なんだかいけ好かないのー」と幼児特有の無自覚な悪意を行使されたビスクドールみたいに、目一杯首を『ぐきい』っと僕の方へと回転させ、『くわつ!』っと先駆者の威儀を開眼させるありすさん。そんな底冷えする圧力の中で、本格ツンのなんたるかを教示され、その奥深さに驚嘆と感化に打ち震える僕なのである。出鱈目だけどねつ。しかし、ビスクドールのやつは本当にあつた怖い話しなんだけど……。

「素さあ、なんかこここ息苦しくない?」

「さぞかし空気が綺麗だつたんだううね、お前のいたとこ「は? なんの話し?」

「涅槃の話し」

「意味わかんない」

「意味はわからなくても、人生は謡歌できるのだよ。とりあえず食せ」

「うい、食す」

魂が定着し現実へと回帰したのを見計らつたあと、一分のースケールありすさんから退去する僕。なにやら味がしないだのどうだの騒いでいたが、まあ気にしない。再発防止を兼ねた行為なのだから、それは仕方がないのですよ。

「本当に大丈夫なのか?」

保護欲をフルスロットルさせた揃姉が、顔を寄せて僕へと訊ねる。だけど視線は僕へと向けてはおらず、一枚目のトーストにかぶりついている気になるあの子にご執心中だ。まあ幾ら軽症とはいえ、『嫉妬』は奴の専売特許なので心の最奥にそつと仕舞つておく。

「別に淋しくなんかないしい」

「淋しくなると鼻血が出るものなのかな？」

「兎ですらそんなもの出ませんよ。やだなあ 摂姉。

「さては摂姉。空氣詠み人知らずのジョブを取得していますな？」

「いや、私は刑事だが」目線を固定したまま摂姉は言つた。天然をとことん貫く摂姉、超絶可愛い。

摂姉の横顔を盗み見ながら、すっかり冷め切つたトーストを頬張る。それからアリスへ視線を向けて、軽く逡巡。他愛無い日常の延長線上だと思っていたものが、存外に厄介を秘めたものだと再認識した。

江戸川・フルフル・莉鈴を捌け口とした、夢枕ありすの感情の露呈。

そう……、昨日の昼休みの一件にその兆候は窺えたはずだけどな。軽く見ていたどころか、軽く見すぎていた。

まさか、摂姉の言葉に過剰に反応して壊れてしまつとは思つてもみなかつた。

まったく、僕という人間を意識しづぎなんだよお前は。

「ん」僕の視線に気づいたのか、ありすは大仰に頭かぶりを振つて、そして敵愾心あらわ露に僕を睨みつける。「な、なによ？じろじろ見ちやつたりしてさ、あ、あたしの顔になんかついてるのでも言いたいわけ？」

「ついつてるというか……、ティッシュが鼻に突き刺さつてるよお

前

感情複合バッドステータス16

僕の先走りすぎた指摘^{ネタバレ}に、ありすの頬の肉が痙攣した。困惑をあけすけにさせた視線を僕に停滞させたまま、おずおずと指先が件のティッシュに接触する。ある切欠を境に、仄かに熱を帯びて朱色になつていた顔^{かんなはせ}が、加速度的に深紅で染められていく。

意味を違えて羞恥の色に上書きされる様子を眺める中、自業自得とはいえ後悔の念が頭の中で蠕動した。自重という単語が今頃になつて展開していたけれど、砲撃手なにやつてんの！？ って感じで、遅すぎる弾幕に絶望氣味だ。

「にやにやにやにやにやんでつ！？」 そうありすは悲鳴をあげて、それから一拍おいたあと瞳孔を収束させ手で鼻を覆い隠す。明らかにありす自身の疑問と思しき声音^{おほ}だけど、擬人化された猫が狼狽するような鳴き声に聞こえなくもない。ありすの眼球を、猫のそれと連想したからかな。もしかしたら、ありすの中の人は妖精猫^{ケットシ}で、我輩は猫でなかつた事実に驚いてるのかも。そういう可能性も考慮する。「ふなななななつ！？」

まああり得ないと思うのだが、罷り間違つて仮に後者だとしたら、妖精王國^ご帰還の際には是非とも鯉と蛇をお供に加えてほしいものだ。

しかし。

それが正しいか否かは、僕の裁量では決めかねるけど。
さて、妄想と懊惱はさておき。

「ところで揃姉。昨日の電話、もしかしたら揃姉の仕事と関係あつたりする？」 何の前触れもなく、そんな質疑をする僕を揃姉は流し目で一瞥し、そして黙殺する。

はい。では、肯定ということで。

そんな評価を下したあと、二杯目^{まか}のコーヒーに口をつけた。
ありすに駄目出したあと、二杯目^{まか}のコーヒーに口をつけた。

る自分が容易に想像でき、そんな事実に少しだけ首を捻る。見た目もさることながら、味もグラン・ギニヨール的とはこれ如何に？「というか、血液の匂いが顕著なんだけど」カップに鼻を近づけて、くんくんかくする。しかし、ズビビビと音が漏れるのはどうしてだらう？

感情複合バッドステータス17

洗面所を兼任したバスルームをあとにする。

まだ鼻にありすの体温の余韻が残留しており、それが温床となつて実体のない質量を芽吹かせていた。

「あででで……」 今だ痛みに苛まれ続ける鼻の表面を撫で擦る。「まるで鎌鼬かまいたちだな」

もつとも実際に切れたのは、表面ではなく鼻腔なんだけど。

しかし、気づかなかつた点を踏襲するならば、どちらにせよそれは同義であると認識せざるを得ない。「顔を洗つて来い」 そんな揃姉の言葉で、初めて僕は自分の顔の異変に気づいたわけだし。

「女の子の鼻に、勝手にティッシュを詰め込むやつがあるか」 僕がキッチンに這入つてくるなり、開口一番揃姉はそう呟く。

ありすの手のひらで圧縮された鼻を搔きながら、天井を見上げた。呆けていた幼馴染に処方できる最適な手段はあれくらいなものだろう。それよりも上位の方法はあるにはあるのだけれど、鼻の入り口に唇を押し付けて蝙蝠みたいに鼻血をちうちう吸つてみたりでもしたら、眼前の姑が夜な夜な欲求不満で憤りそつなので敢えてソフトな手段に落ち着かせたのである と、「冗談はほどほどにして。

「あれは不可抗力なのです。溢れる情熱バースを堰き止めるには仕方がないのですよ」 たはは、つと揃姉に愛想笑いを振りまく。

揃姉は目を細めただけで、僕の言葉に言及はしなかつた。コーヒーを嚥下したあと、カップをコーナーに載せてテーブルに目線を置く。それから、僕にまた目線を配置して「で、嫁は?」、とテーブルクロスに惨劇を振り撒いた地獄少女の所在を訊ねた。

「家に戻つたよ。化粧を直さなきやどうとかこうとか

「そうか」 揃姉は首肯して、何故かそこで相好を崩す。なんだろう君。

「今からありすを迎えて、そのまま学校に行くから」 食器を

シンクへ運びながら僕は言った。「テーブルクロス、洗濯機に放り込んでおいて」

「わかつた」

「あ、洗濯機は回さないで良いから。で、食器は帰つてきたら洗いますので」

「わ、わかつた。それはお前に一任する」

「あ、それと財布にレシートしか入つてなかつたんだけど」

尻ポケットから財布を取り出して、揃姉に証拠を開示する。

椅子から腰を浮かせた揃姉は財布を覗き込み、眉間を揉みながら嘆息した。

「財布は、私の部屋のキャビネットにある」合法的に、勇者のアウトローな搜索を許可される僕。合法ついでに筆箇も検査の対象に加味しようか。なんだかオラわくわくしてきたぞつ。というのもちろん冗談ですの、あはつ。「好きなだけもつていけ」

「いや、揃姉凹みすぎだから」自暴自棄のステータス異常に罹つた揃姉を嗜める。ちなみに頬は林檎病を患つております。

「わ、私は、凹んでなど、いない」唇を尖らせて抗議を漏らす揃姉、いとかわゆす。

感情複合バッドステータス18

揃姉の言葉に軽い機知感を覚えつつ、僕は廊下へと足を運ぶ。

そして、廊下へと差し掛かろうとしたそのとき、

「ときどき、お前は嫁への配慮に欠けることがある」ふと、揃姉がそんな咳きを漏らした。

振り返らずに鼓膜だけを反応させる。

思考は幼い日がありすを想起していた。

まだ、揃姉に嫁とも呼称されず。

まだ、僕に幼馴染とも定義されていない。

マンションのエントランス。挨拶を交え入居してきた旨を朗らかに伝える母親の後ろで、僕をやぶ睨みする名前も知らない女の子。彼女の両手に抱えられていた人形が、ビスクドールだと教えられたその日の夜。その夜に付属して、怒っているような泣いているような、そんな顔の揃姉が海馬から抽出された。

「僕はいつだってあんな感じだよ」遡行し心の底で鬱血し始める白黒映像を言葉で融解させる。

「自覚はあるみたいだな。しかし、うかうかしているとお前はおいてけぼりだ」

口端に苦笑を宿らせたふうな声調で、僕の未来予想図を展開する揃姉。

まあ、揃姉がそんなことをするまでもなく。

既に僕はおいてけぼりなんだけど。

すわすわ、籠鮎クラブナに目を輝かせる女の子の成長は著しいよつで、まいつたまいった。

「どうでも良いけど、フナつてコイ田コイ科コイ亜科フナ属の魚なんだよね」

「何の話だ?」

「ちょっとだけ湿っぽい話し」首を旋回させたあと、そうおどけて

みせる僕。

「意味がわからないな」胡乱に僕を眇め見ていた揃姉も、やがて目線を外しあもむろに首を旋回させた。それから、カツブに唇を漸近させて、「お前も寝不足か」と泥濘とした液体に息を吹き掛けた。

さて、登校中でも僕はおいてけぼりなわけですが……。
いや、メンタルではなくフィジカルになんですけど。

アスファルトが昇華する熱氣に噎せ返りそうな気分になりながら
も、どうにか僕はありすの追随に尽力する。なんというか僕の歩調
に合わせて加速度を増している感じで、まったく追いつけないし。
可笑しいな。寝不足気味なのは僕ではなく奴のはずで、こうして僕
が憔悴と酷似した空転に苛まれる謂はないんだけど

とにかく、今日もありすさん元気一杯なご様子で、ツインテール
をアナログコントローラみたいに上下左右、変幻自在にゆんゆん躍
動させていらっしゃる。そのアーチキーな拳動に意図の読めない不
機嫌の予兆が垣間見えるのは気のせいだろうか。食事中のあれは、
僕の流血という意趣返しで落ち着いたと思うんだけどな。さしづめ
心当たりがあるとすれば、玄関先で見た奴の勝ち誇ったポーズだろ
うか。腰に両手を添えながら顎をしゃくりあげて僕を見下ろす様は、
さながらお姫様というより女王様然としてそれなりの雰囲気は演出
していたけれど、その雰囲気に当たられて傳いてしまうほど僕は忠
誠を捧げていないのだよ、きみい。

そんな益体のない思考を巡らせる中、ふとありすが歩調を緩め振
り返った。

探りを入れるような視線を皮膚が察知して、思わずそぞろ歩いて
しまう僕。当然、距離は一定の間隔を保持したまま、僕とありすと
の間に生じた空間に熱で爛れた空気が滞留する。

「な、何か?」額に滲む汗を拭き吹き、僕はありすに訊ねた。
「別に……」そう吐き捨てて、鼻を鳴らしてそっぽを向くありすさ
ん。その際に、ローファーがアスファルトを強く打ちつけたのは、
何かのサインかはたまた不機嫌が具現化された表れなのか。「ああ
もうつ……、これだからにぶちんは」

ふむ。どうやら両方を兼任していらっしゃるようだ。

しかし、僕が何らかの評価を下すほど眼前の幼馴染に変化のほどは見受けられないけど……。だが強いて挙げるならば、奴の膝上でをコーティングしてくる靴下が漂白されたくらいなものだろうか。あとは日本の慣用句的な代物にひらひらなレースが装飾されていることを言及しておく。まあさして意味はない微細な変化だと

は思つけどね。

さつきのありすの物言いに多少の憤りは覚えたが、結局僕は愚鈍であるということを享受して妥協することに落ち着いた。まあ僕もまだまだってことで、お姫様のお眼鏡に適うよう尽力する次第で御座いますわ。その方向性は畠田見当もつきませんけれど。おほほ。

感情複合バッドステータス20

「「めんあさーせ」

歩調を緩めたのを好機と見て取り、アスファルトを踏みしめる回数を上昇させる。茹だるような外気に伴い背中の皮膚が落涙を訴えているが気にしない。優しさと余計なお世話をワイシャツに兼任させて、本懐を遂げるべく僕は歩を進める。これでも世間では姉思いの弟で通っているのだよ。一部でシスコンと評されているところが不本意では！？

「そーい」

頸をかすめる暴力に思考がぶつ切りになつた。

重心を失い、太陽に干された眼球がたちまち黒焦げになり視界を酩酊させた。眼球が覚える酔態に便乗して身体を後退させ、両脚に少しだけその余韻を愉しませる。それから皿蓋越しに指をそつと当てて酔態したそれを押し潰した。

やがて素面しらぶに復旧した眼球が、撲殺天使（未遂だけじ）の認識を開始する。

腰に右手を当てて前屈みになつて、僕を眇め見るありすさん。暴力を持て余し振り子時計の道化へと変じた鞄を一瞥したあと、おもむろに姿勢を正し再度僕に視線を投射する。

「隣に立たせてあげてやんない」そしてにべもなくそう吐き捨て、一度頬を膨らませてから「今日のところは」と、咄でマシユマロをくるみ込んでいそつなも「も」とした声調で補足する。

「どうしても？」

僕の質疑にありすは無言の首肯で応答し、

「だから今日は私のお尻でも堪能していりょつ！」「ひとしきり僕を睨みつけ、上擦った声でそう宣言した。

「……」「……」「……」

いや、言つてゐる傍から動搖されちゃあこちと立つ瀬がねーんですけど。まあ幾ら幼馴染とはいへ、視姦は御免こいつむりたいところだけど。

僕の意向などてんて意に介さず、ありすは踵を返し、ふんすか歩き始める。もちろんありすの言葉を鵜呑みにするのはけやんぢやら狂つてゐるので、全体のシルエットが視界に収まるようにして所在のほぞを固めた。仕方がない。今日のところは見習いのスタンスに甘んじようではないか。情報が不足しているのも確かだからな。

揃姉かんばせはあんな調子だし、ありすに至つてはときどき思わせぶりに振り返る顔から察したところ、あいつから情報を抽出するには困難な気がした。もし仮に今すぐありすから情報を得ようとするとならば、僕は性格の修正を早急に図らなければならない。

しかし、鈍いなりにもさつきの言葉が含蓄を持った表現だとは概ね理解できるけど。

だつたらスカートの中を透視でもすれば良いのか、と思つてゐるが僕の限界を如実に表していて笑えてくる。

「何か面白いことでもあつたの？」

「いや、面白がるほうが変態だろ」

振り返り不機嫌そうに訊ねるありすに、僕は平静を取り繕つて応えた。

「意味わかんない」

わからんでよろしい。

昇降口にて、僕達の爛れたアバンチュールはひとまず終息を迎えた。

で、結局僕は韜晦するありすを解さぬままここに至ったわけで、その際湯尽し湯豆腐みたいになつっていた脳みそは、「それでどうなのさ?」と僕の心中などお構いなしに詰問する奴によつて木つ端微妙に打ち碎かることとなる。僕がその詰問に応えあぐねるのはむべなるかな、「そんなことより上履きに履きかえようぜ」などと鼻孔から「ゴーヤがひり出せそうな嘯いた切りかえしができるわけでもなく、ぐしゃぐちゃにされた頭の中の湯豆腐があたかも襟元へ流れ込こんだようなアンニコイな面持ちで、こうして僕は黙して因果の応報に身をつまされているわけなのだ。

つまり、手段が目的へと刷りかえられた好例ともいえる。
しかし

スカートの丈が短いと、自然とそひひ目が向けられるものだよ。

誰ともなしにそんな感想を漏らしてみた。さて異論はあるかね?
いや……、

諸君気にしないでくれたまえ僕の思考は今やチャンブルーしている。

泥濘とした思考に苛まれながら僕が口を噤んでいると、ありすは短く鼻息を漏らしそのあとに『やれやれ』と言葉を追隨させそうな雰囲気を匂わせて指定の下駄箱へと姿を消す。

「随分と堪能されたご様子

そして起伏を損なわせたプラスティックみたいな声が、消失したりすに入れ替わり僕を再び苛み始める。眉間を揉みしだきながら嘆息を繰り返す。振り返つて確認するまでもない。

「お前は這い寄る混沌なのですか?」そう。我らが秘密結社同好会

を束ねる人外、ナイアラルトホテープとはこいつのことだった。「桜庭……、つけてたのか？」

「心外」トリックスターの予兆を垣間見せて、桜庭灰霧が僕を横ぎる。「良い感じの雰囲気に声を掛け辛かつただけ。特に恩田君が」「お前の眼は節穴だな。あと最後の言葉は聞かなかつたことにしておく」

「恩田君の眼にはオセロが張りついていそうね」

「耳にポップコーンでも詰め込んでいそうな意味のわからなさだ」「恩田君は猫を耳に飼っているのかしら？ 煙に巻いてこの場が丸く收まると思っていたらとんだお笑い種だわ。罪を悔いて、しかるのちに根無し草を芽吹かせなさいな」

あれ？ 益体のない言葉の応酬だと思っていたんだけど。
もしかして、いつの間にやら僕は貶められていたりする？

「ストーカーの捕縛は、風紀委員のお仕事なのかしら？」首を傾げてから、桜庭は下駄箱から上履きを取り出した。そしてどうしてか上履の底を打ち合わせ金属製円盤の真似事に興じる。「とにかく……、迎撃する」

ぱんぱん、と乾いた音を断続的に立てながらにじり寄つてくる桜庭。あらぬ誹りを受けて遺憾極まりない心持ちだつたが、しかし身体のほうはそうではないらしい。汗顔し桜庭の歩調に合わせて後ずさる様は、まるで崖っぷちに追いやられる犯罪者みたいで滑稽ですらある。

「心当たりがあるからそういうふうな行動にでる」桜庭が、僕の深層のメッセンジャーを請け負う。さもありなん。「大人しく靴底のガムにおなりなさいな」

「いや待て桜庭、話を聞いてくれ」

「何やら恩田君の唇が蠢いているようだけれど、聞こえないわ。だつて私鼓膜搖らいでいいもの……、耳にポップコーン詰まつてるから」

「変なとこで複線張つちやつた！」

叫び、さらなる後退を僕は余儀なくされる。しかし、もう後がない。板張りの段差は緩慢ながらもその差分を確実に失いつつある。その先にあるのは、無機質なまでに慈悲の欠片も窺えないコンクリートの大海原。足元を取られ赤潮を広げるほど僕はプラントンになりきつていなかつた。だから、自ずと身体はその場に踏み止まる。コンクリートに頭を打ちつけるより、ゴムで引っ叩かれたほうがまだマシというのだ。

そして、とうとう僕は桜庭と対峙する格好になる。

大きな破裂音を昇降口に轟かせて、僕を見据える桜庭。好奇な視線を衆目が投射しているけれど、もちろん桜庭はそんなことで物怖じする女の子ではなかつた。右腕が灯台みたいに聳えて、その頂には上履きが警告灯ばかりに激しく回転している。ここまでくるともう腹を括るしかなかつた。あとは黒い眼が裏返らないよう念じるばかりだ。目蓋を閉じ心の中で思わず十字を切る　おつといけねえ、

脳みそが蕩尽していいるあまり間違つて手刀てがたなを切つてしまつたぜ。

固睡を飲んで、頭頂部に上履きが振り下ろされるのをじつと待つ。いつそ深層に燻つているエロい気持ちごと吹つ飛ばしてほしいものだ。そう思えばこのこさか不条理じみた肅清も僥倖とすら捉えられるというもの。さあこい桜庭。僕は世界の中心で、ひつあんですを叫ぶであらう。

ところがじすこい、僕は無事だつた。「あ……、れ?」

「何をしているの? キスの練習?」聞くとたちまち赤面どころか、すっかり黒焦げになりそうな言葉をのつのうと桜庭は世に解き放つ。痛覚を伴わない頭頂部の感触を不思議に思い、僕はおずおずと皿蓋を押し上げた。

まず桜庭の白い腕を視認した。だけど上履きはその先に付属していないはず。見下ろす視界に桜庭の性格をそのまま具現したような上履きが映つっていたからだ。几帳面に、板の上に揃えられている。

「恩田君、可愛いわ、恩田君」

こいつ犬みたいに僕を扱つていやがる……。さつきまで上履きを掴んでいた手で、僕の頭を撫で擦る桜庭。冷たい手のひらにも関わらずそれは意外と柔らかかった。こいつを構成する物質が、プラスティックではないと認識を改めるときなのかもしない。しかし桜庭、生憎お前に振る尻尾は、僕は持ちあわせていないのだよ。「一体、何の真似だ桜庭?」

そう訊ね眇め見る僕に、桜庭は小さく鼻息を漏らす。それからおもむろに頭から手を離して携帯電話を取り出し、僕の鼻先へと差し出した。

「可愛い恩田君をもつと可愛くするアイテム」顎を引いて桜場は言った。「これは謂わば……、骨つこよ」

「すっかり犬扱いだな」嘆息と一緒に言葉を漏らした。

どうやらまだ耳にポップコーンが詰まっているらしい。僕の質疑には応答せず意味不明なことをのたまう桜庭に、痙攣する目蓋が眼球を疼かせて仕方がない。

「さあ齧りなさい」

「僕はお前の聞き分けのない耳を齧りたいよ」

「聞き分けの良い恩田君は、私の韜晦もすぐに気づきそうね」そう言って、桜庭は僕の鼻先にある携帯電話を一瞥する。「ちなみにこれ、ロジカルに味わうものなの」

あ、それとロジカルとデジタルつて少しだけ似ているわね。と、最後に桜庭はそんな言葉を空気に昇華させた。

その瞬間、蕩尽していた思考が燎原の如く機能を取り戻した。まずは僕のセクハラ発言を突つ込みよ ふと湧き上がった桜庭に対する賞味期限切れの突つ込みは心の簾笥の隅にひとまず仕舞つて 目の前に提示された携帯電話と、昇降口の空氣へと昇華した

桜庭の言葉を思考に関連づけさせる。

そして、桜庭灰霧という人格をそこへ加味したとき、答えは必ずと導き出されるわけだけど……。

「いや、まさか……、お前撮つてた?」

それでも、僕の口からひりだされるのは、困惑のオブラーートで包まれた上擦つた現実。

しかし、否定も肯定もしない起伏を損なわせた桜庭の表情が、その不確定な要因に地に足を着かせる。

「な、何が望みだ？」

上擦つた現実を継続したまま、僕を見据える桜庭にそう尋ねる。自身の部位ながら思慮の深い唇には図らずとも感心してしまった。諦めが早いとも捉えられるが、桜庭相手ではこれが最適の手法であるのはまず間違いない。

「殊勝な心掛けだわ」

短い鼻息を漏らしたあと、桜庭は口の端を不適に歪める。きらりんつ、と語尾に星マークでも踊りそななくらい、奴の眼鏡は昇降口の照明を乱反射中だ。そのマッドな演出に、夏休みに出会った科学者が重るのは心的外傷が魅せる妄想かしらん。無理難題を推しつけた拳句、よもや僕の腕をドリルやらパイルバンカーやらに改造する気ではないだろうな……。

「ちょうど喉が渇いていたところよ。何か飲み物でも買つてきなさい」

「どうるるるる……」桜庭の不条理な提案に思わず舌を巻いてしまう僕。巻いたついでに巻き舌で威嚇してやるつって、あれ？

「え？ そんだけ？」

「そう、それだけ。投げたフリスビーを取りに行くくらい、簡単なことだと思うけれど？」

「いや、まあ確かに簡単だが」不本意ではあるけども といつもり結局犬扱いなのね僕。「で、お前は何が飲みたいの？」

「懐は痛めるけど、心は痛まないのね恩田君は……」

「申し訳御座いませんっ！ ご主人様は何をご所望でしうかっ！」

「僕何も悪いことしていないんだけどねっ！ おかしいなあ！」

「もちろん、ありすの分も買つてくるのよ？」 まんまと桜庭のペースに嵌り、哀れ犬畜生と成り果てた僕は喪失している尻尾の代わりに頭を激しく上下に搖さぶる。「さあ、お行きなさいビヤッキー。

早くしないと黄金の蜂蜜酒がなくなつてよ?」

「どうから突つ込んで良いんだよそれは?」

訊ね返す僕に桜庭は何も応えなかつた。ただ無言で携帯電話を力
スタネットを叩くみたいにして開閉を繰り返し、桜庭とのやり取り
を盗み見している(なんだかなあ……)ありすの気配に僕が気づい
た頃、ようやく桜庭はおもむろに口を開く。

「それともまづは私と遊んで欲しいのかしら? 仕方がないわね恩
田君は……。じゃあ、この携帯電話を放るから拾つてきなさい」

と言いつつ……、さては桜庭、ありすと「ラグビー」に興じる腹づもりだな？

視線^{へび}がのたまう背中に痒みを覚えながら、ちらりと後方に首を捻る。下駄箱の隅から半身を乗りだしているありすさん。どうやらジエラシックパークの園長さんを襲名していらっしゃるようだ、さつそくその本懐を遂げている様子。田は据わっていますが、爪はぎりぎりと立ちまくっているのですよ。

「しかし、あいつお前とスクラムを組む気はないようだけど？」と自ら立てた推理を声に出してあつさりと否定。桜庭も異論がないことを無言の首肯で示し（やつぱりやるつもりだつたのか）、「心のキヤツチボールすら困難」と分析を吐露する。微妙に会話が成立していないのは、ありすが醸し出す空気のせいにする。さつきから下駄箱の歯軋りがまあ煩いのなんの。

「あんなあります初めて」さすがの桜庭さんも驚きを禁じえないようで、目を大きく見開いたままそんな感想を漏した。むべなるかな。僕も実際目の当たりにするまで、ありすがあんな娘だとは思つていなかつたしねえ。「よつぱり、恩田君のストーカー行為が気に入らなかつたのね」

「そつちかよ！ いや……、だから僕はやつてないつーのー！」

「まあ良いわ。でも恩田君、罪は忘れてもジュークを奢るのは忘れないで」と桜庭、何故か僕の背後へと回り込み、それからついつと背中を後押しした。「私の中の気象予報士が血の雨を予報しているわ

あー、それはないと思つけどねえ。まあ桜庭なりの気遣いと解釈して、敢えてそれに甘んじてみましょつかね。「へいへい、じゃあ適当に何か買つてきますよ」

そして、昇降口に剣呑な雰囲気をばら撒いた元凶は、すいすいと

その場を立ち去るわけですが

「お？」人工的な引力が、今だそこに僕を留めさせた。「お、こりゃ

桜庭、引っ張つても黄金の蜂蜜酒は奢つてやれないぞ」

「どこへゆく？」

おや桜庭さん。一体どこでそんな声帯模写を？

そんなことよりも桜庭さん、二の腕に爪が食い込んでいたたたなのですよ……。

威圧的な聲音とバイオレンスな痛みに苛まれた僕は、思わず後ろを振り返る。しかし、僕を留めているのは桜庭灰霧ではなく、

「どこへゆく？」ジエラシックパークの園長さんであるところの夢枕ありすさんなのであつた。「あ、あたひをおいて、どこへゆくつて一ゆーの？」

どうやら黙々と子も兼任していくつしやるかうつで。

いや つくづく田和見主義者だなあ、と。

え？ 何がつて？

そりやあ……、自分のことですよ。

「ふごつ！？」

右折しそこなつた身体に追随して、ありすの顔面が背中に接触する。

「あぎやつ！？」

重心を失い思わず身体がつんのめりそくなつたけれど、僕の二の腕を掴んでいた手がサルベージを試みたようでどうにか体勢を維持することができた。しかし、その対価として細胞が壊死したのは明らかであり、鼻の穴がミントの香りで充填されそうな、そんな爽やか極まりない早朝の廊下が提供する空氣に不純物を混入させたもまた無理からぬこと。

「痛あい……、止まるなつ」

「痛い……、パチくな」

まるで水差し鳥の申し子みたいに、おでこで背中を小突くありますを嗜める。噎せ返るくらいの衝撃ではあるのだが、しかし如何せん神経は二の腕に収束しており、それに追随する僕の弱つた声音ではありすの蛮行を阻止するまでには至らなかつた。寧ろ衝撃が呼び水となつて心身は衰退の一途を辿るばかり。抵抗する気概も湧かないまま、薬指と小指の爪が皮膚に埋没するのを人事のように僕は眺めていた。

うーん、これは……、いつぞやの似非吸血鬼に噛まれたのを喚起^{（アルビ）}

わせるくらいの流血だよなあ。

このままだと自動販売機にたどり着くまでに致死量へと至りそうだ。

ありすさん！　これ以上はらめくつ！　　今日のありすさん、マニキュアにラメ入っちゃつてるよつ。はあと　と、同伴する万力娘に抗議をしたいのはもちろんだが、しかし、先ほどのやりとりから察するにそれも徒労に終わることは間違いないだろう。そして、僕達を通り過ぎる際に田線を送信する生徒達もまた、僕とあります間に生じている密度を剥離する効果は期待できそうもない。皆さん、のべつまくなし直ぐ目線を外しているからねえ。

しかし、僕とありすが厄介者扱いされる要因は……、まあ観察者からすればバカップルに見えなくもないか……。当事者としては余計なお世話だよと意義申し立てたいところだけど。それとも、神聖な学び舎に流血を贈与しているのが起因しているのかな？

「ここは僕的に後者の方を推奨したい」

「ひつー!?」

といつより、寧ろそつちの線が濃厚かもしだなかつた。

まさか、悲鳴のあとに続く言葉が「バカツブルだわ」じゃないよな。足早で教室に向かう女の子の背中を眺めながら思案に耽り嘆息する。まあどちらにせよ、僕としては歓迎できる代物でないことは変わりはない。背中でセツショソンしている、獵奇的な彼女の方はともかくとして。ああ、これは前者に限つての意味なんだけれど。日本語難しいですね。

「あぎや あぎや あぎや あぎや 」

このまま立つてゐだけでは埒が明かないでの、前進を試みようと僕はもがく。パチくのを止めないありすさんをずりずり引きずつたり、ときどき立ち止まつては腕を穿つている爪の進行具合を確かめたりして僕達一人の前途は日下多難を極め中。

随分と交流が途絶していた故に、尚更自分の迂闊さが身につまる。

しかし、剥き出しにされた感情がここまで厄介だったとは。

幼馴染の気持ちに気づかなかつた当時の僕としては無論杳として知れないわけで、しかし、知つたところでそれを持て余してしまるのは物理的な損傷を被つている時点で既に実証済みだ。どうにかなるかなど思つて、幼馴染との因果の修復に勤しもうと日和つてみたけれど、これは……、僕がどうにかしないといけないみたいだな。いや、それよりもまずは、現在置かれている僕の状況をどうにかしないと。

いつも感情に雁字搦めにされていると、思考すらもままならない。

「ひつー……、あの馬鹿。私置いて、一体どこへ行くつて言つのよ

う

「ありますさん、僕はここにいる……ここにいますよつ……」

嫉妬と猜疑の果てに視野狭窄に陥つた幼馴染に、僕は自我を主張し所在のほぞを固めてみる。だけど、ありすさん全然聞いちやくれねえわ。流れる血も止まっちゃくれねえわ。行き交う人はもう目もくれねえわ。さすが一階がインフェルノと揶揄されるくらいはある。いつそ食人鬼になるくらい目一杯弹けてくれりやあ、と強がつても絶望を上塗りするだけで益体ない。

「大丈夫？」

おや、渡る世間は鬼ばかりだと悲観したときに声が掛かった。地獄も存外捨てたものじやないな、希望を胸に僕は停止し声の主の識別を開始する。

が、僕に寄生しているありすの体重が背中に負荷をかけ識別に支障をきたした。再び重心を失った僕は前のめりに転倒しそうになる。視界にリノリウムが漸近し、そこでどうしてか腕を握り潰されたような錯覚と激痛。そして、自ずと咽頭は絶叫をひりだそうと収縮を始めた。なんて冷静に状況を描写している場合じやなさそうださつき喉からどろりと鉄の味が競りあがった気がしたけれどもちろん気のせいだよな！？

「ぎいいいいい！？ かはつ」 圧縮と開放を一気に味わい行き場を失っていた音が空気に触れた。

思考が現実との接続を試み、矢継ぎ早に腕の所在を眼球が求める。腕は綺麗にその形を保っている。そのままパックして出荷しても恥ずかしくないかな。でも、タグに加工品とでも表記したほうが良さそうだ。赤色の傷跡を指でなぞつたあと、半透明の爛れた皮膚を巻り取る。

「そういう夢枕ありすは斬新かも」

その女の子の声で顔を上げる。身体から乖離した僕の皮を指で持て余しながら。

それで、気づいたんだけど、どうやら僕は尻餅をついているらしかった。

ジャージ姿の女の子が僕を見下ろしている。

いや、見下しているといったほうが正しいかな？ まあ僕のことはとりあえず置いておいて。

でつかいヘッドフォンつけたそこの君、一体だ／あ／れ？

「さしづめ、キミ達一人はあなへきへつてところ?」鈴を転がしたような声でそういったあと、女の子は缶ジュークのプルタブに指を掛ける。

【圧縮されていた空気が弾けて、白い飛沫が散見したかと思うとそれは僕の胸に降り注いだ。

服に付着していた血痕が淡く滲む。その近くには女の子の小さな指。ロマンティックエンジン全開さながらに、『白い小さな指』と表現できないで申し訳ない。遺憾ながら、彼女の指は既に僕の血液で汚染されてしまっている。

「恋愛に明確な戦術は存在しないって信じているけれど、キミ達……いやキミのやつてことは出鱈目だね。無秩序は無秩序なりにそれなりに秩序を保つていてるものだよ、まったく」敵愾心はそのままに、僕を見下ろしている女の子は嗤つ。「それでは異端ではなくまるで道化だ」

ふむ、その口振りからすると、もしかしたら眼前におわしますのは噂に聞く風紀委員の方かね? それで、神聖な学び舎を血で血を洗つて、バイオレンス咲き乱れる僕らのバカッフルぶりを見かねて権力を行使しにきたと? うーん、それこそ異端だと僕は思うなあ。何故なら僕達は見た目と違つて、清い間柄なのだよ、わはは。でもそれは無垢の白ではなく、虚無の白だけどな。

しかし、糾弾している対象が限定されているのが、どうも気にならぬ。良く観察してみると、女の子の田線は僕を捉えてていないみたいだし……。

「それで、夢枕あります」女の子から視線を外して、染色された服を僕は一瞥する。そこに添えられている指が不快に蠢いた。「そこまでに至る、キミの心情の変化は一体何なのかな？」

「どうして今頃……、今になつてあんたが現れてくるのよ？」

「そりやあ決まつている。キミが新しいからだよ、夢枕あります。人間新しいものには自然と目がいつてしまふからね……、違うか？」

ああ、確かに夢野先生（変態外科医のほうじやない人ですよ。念のため）のあの胸部は、僕にとつて斬新ではあつたな。

控えめとつるべたの板挟みだった人生にひとしきり思いを馳せたあと、慇懃に首肯する。もし声に出して肯定したものなら、そのまま調子に乗つてS・O・Tになだれ込んでしまいそうだったので、もちろん口は噤んだまま。ついでに開きっぱなしの右脳も引き締めてみた。その際、「おっぱい万歳」などと言葉が練り歯磨きみたいに格好悪くはみ出したのはここだけの秘密だ。

「知つたふうなことを……」

「知つていてるから訊いてみたんだけどね……」

さて、いまいち締まらないどこの馬骨野郎の冗談はそこそこにして

二人の言葉を皮切りにして、僕達を取り巻いている電子が一気に密度を増す。

すっかり蚊帳の外にいる気分で、出会つた頃からまるで成長の兆しすら窺えない幼馴染の胸に凭れながら口和つていたけれど、この剣呑な雰囲気に僕は流石に息を呑まざるを得なかつた。

呼吸ですら化学反応を誘発せそうな 危うすぎる雰囲気。

電子の嵐が吹き荒ぶ廊下で、チリチリと、音にならない幻聴がさらに不安を急き立てる。

開いたジッパーから伸びるコードを弄びながら、女の子はときどき僕に柔軟な表情を見せる。女の子の顔は仄かに朱色を帯びていて、瞳孔の焦点は定まらない。苛々しているんだかもじもじしているんだが、状況が状況だけに裁量を量りかねるな。

しかし まあ僕と彼女の関係は概ね把握した。

それと、彼女と彼女の関係もまた然り。

前者のほうはもう少しだけ検証する必要があるけれど、後者に至

つては検証の余地すらないだろう。

後ろからベアハグきめているありすの反応から、彼女の感情は窺い知れる。そう。僕に触れているのを忘れるくらいに、こいつは平静を維持できていない。

「夏休みの間になにがあつた?」女の子の声が1オクターブだけ低くなる。「キミに変化を生じさせる起因があつたなら、その期間以外に考えられないからね。違うか? 夢枕あります?」

女の子の質問、いや、詰問にありますは応えない。

ありすの反応に女の子は微かに唇を歪めただけで、それが沈黙を前提とした詰問であつたことを僕は理解した。

そして女の子の対象がありすだけではなく、僕も含まれていたといふことも。

まいったなあ……。

フライパンの上で踊っているポップコーンみたいに、色々な感情が口から飛び出しそうになつたけれど、女の子に舌を巻くことでどうにかそれを塞き止める。きっと女の子の眼には今ごろハリセンボンが写されているに違いない。辻闘に触れると怪我しちゃうぜ？

わはは。

僕も後ろのベア子ちゃんに倣つてぐわぐわ吠えずに大人しくする（感情の流出を防ぐための処置だつたけれど、沈黙という行為にしてならば、それはきっと同義だよな？）。

しかし、こうも膠着状態が続くとなると僕の高校生活における皆勤賞の夢が僅か半年足らずで潰えることになるな。いや、思つてもいいクリムゾンな嘘なんですけどね。

だけど、現状を打破しない限り僕たちはこのまま停滞し続けるであろうことは、搖るぎのない事実。

さて、どうやら馬骨野郎が水差し野郎にクラスチョンジするときが訪れたようですね。

おもむろに腰を浮かせながら、身体に密着しているありすを引き剥がす。思わず嘆息してしまうのは仕方がない。メランコリックな気分になつてしまつのも然り。最も今置かれている僕の立場ではなく、これから先の僕の立場のことなんだけれど……。

「まったく……、これから先、桜庭に弄られる」と考へると、S A N 値が減少していくのが否応なしにわかるな

「恩田君のあまりにも役立たずつぶりに——」桜庭灰霧は嘆息をしたあと、僕を見下ろす。「私のSAN値は激減の一途を辿るばかりだわ」

「ジュースを買い忘れたくらいで、お前は正氣を失うのかよ……。
「なにを大袈裟な……」

思考がひり出した言葉は上手く音に変換できず、ザラザラした呼吸と一緒に出がらしのお茶みたいな声が外気に触れる。

声も震えているが、身体も酷い有り様だつた。

無理もない。いくら女の子とはいえ、それなりの体重をもつた立派な物体だ。それが動かないときたら尚更、死体を運んでいるのと同じことだらう。

それを一階から二階まで引きずつてきたのだから、僕の身体もさすがに悲鳴を上げざるを得なかつた。もっとも、内に潜在する野生が顕現していれば、こんな惨めな状態は回避できたんだけれど——まあ、いずれにせよ後の祭りだ。

夏休みは、もうとつくな終わつてゐる。

「それで——」桜庭の抑揚を欠いた声に、僕は再び顔を天井へと上げる。「本来私のジュースを握つてゐるであろうその右手に握られているテディベアは……、一体どういふことかしら?」

おや？ 僕はそんな可愛いものを握った覚えはないぞ。第一ぬいぐるみが汗ばむわけがないじゃないか。

「今日のクラスの話題はもっぱら恩田君たちの噂で持ちきりね。放課後あたりには学校中にその噂が広がることでしょう」

「なにを言つている？」

「私の中にいる気象予報士はなかなかあなどれないものよ」「いや……、だからどうこうことだ？」

「それは、恩田君自身の眼で確かめた方がよろしくってはなくて？…あはは、こいつはお嬢様言葉になつてらあーーなどと、どうやらツッコミを挿入している場合じやあなさそうだ。

教室に蔓延する剣呑な雰囲気を察知した僕は、恐々と周囲を見回す。

ふむ、とひとり勝手に頷いてから、壁にある時計仕掛けを確認した。

「なあ桜庭？」

「ん？ なあに？」

「このクラスって……、ホームルームぎりぎりに教室に這入つくる生徒を引くような眼で見る。そんな敷居の高いクラスだったつか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5024f/>

深層心理レメゲドン

2010年10月11日23時57分発行